表裏の狭間

馬チョウ雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
表裏の狭間

【Ｎコード】
Ｎ７６７９Ｖ

【作者名】
馬チョウ雲

【あらすじ】
群雄割拠の大陸のある地方のお話。
そこには領土争いを広げる、巨大な力を持つ３つの国があった。
もっとも強大な力を持つブライト王国
古よりの伝統が息づく中立国、アマテラス王国
そして若き王が治める革命の国、レヴァンス王国
己の守らんとするものを守るため、また今日もどこかで争いが起きる。

この小説は、アルファポリス様にも掲載されています。

狭間の朝（前書き）

初めまして。馬チョウ雲といいます。
最初の小説ですので、今も多分に緊張しております。
この小説のいたるところに設置してある「アルファポリスバナー」をクリックしますと、アルファポリス様に登録してある本小説にポイントが入る仕組みとなっています。
面白かった時やいれてやってもいいかな、と思った時にでも押していただければ幸いです。

最初ということもありまして、話の1話としてはとても軽く仕上げています。
それでは、お楽しみください。

狭間の朝

やっぱり、自分の部屋の自分のベッドの上が一番落ち着く。
と、レンは朝目が覚めると必ずそう思う。
城生活に慣れてくるとわからないモノだが、ココのベッドの材質はそこらの高級寝具店にいってもそうそうは売っていないほどの高級品なのだ。
その点だけは、先王の自分勝手な政治に感謝感謝。
…するはずもなく、先王のことなどこれっぽっちも気にかけずにそのベッドから上半身だけを起こしたレン。
（「やっぱ、頭がガンガンしやがるな」）
心臓が動くのと同じタイミングでズキン、ズキンと脈打つように痛みを引き起こすレンの頭は、昨日の酒の度数の強さを物語る。
深く自分の昨夜の行いを反省したあと、ものの1秒もしないうちにもう一度横になった。頭が痛いから、というのがそれの大部分を占める理由である。
「いや、今日のはヤバいんだってお前。一回頭を何かでかちわってみ？いやマジで。多分同じ痛さだからよ…。いやいやいやいや……」
何の前触れもなくいきなり一人でつぶやきだすさまはとても気味が悪い。こういう時のレンの言葉には「いや」だとか「マジで」だとかの単語が急増する傾向がある。
そうほかの奴らに噂だつほどの気味悪さなのだ。誰が聞いているワケでもないのに、的確な噂が立つとは不思議なものだ。
ともかく、レンが二度寝を決め込もうとしたその瞬間、いつものアイツがいつものようにドアを開ける。

バンッッ。

朝から騒々しいのはもうご愛嬌の域である。

ブロンドの髪を頭の横でツインテールにした、青く綺麗な目が覗き込んだものの心を虜にする眉目秀麗な美少女。
と、自称できそうなほどの美少女フウナの目覚まし代わりの絶叫とドアバンで、いつも二度寝ができなくなるのが最近のオレの悩みなんだ…。
「レン！朝だよ、7時だよ！！」
「朝だってことくらいはわかる気がするよ……」
「そこでまた布団をかぶらない！ホラ起きてって！！」
コイツは城内の人間を全員叩き起こすつもりなのかと思うくらいのバカでかい声でわめき散らすのが得意技のように見えるという、美しい外見を根こそぎダメにしてしまうほどのマイナスがある。
その音源がオレの部屋にいるんだ…。二度寝なんか死んだってできる筈がない。
一応男の部屋ということもあってか、朝っぱらからズカズカ入り込んできたりすることはないものの、わめくことだけはやめてくれない。
そして、フウナが喋る（喚く）たびに頭の中で痛みが二割増しになっている気がする。
「ったく、わぁーったよ！ちくしょ、頭痛えってのに…」
「どうせまたたくさん飲んでたんでしょ？」
さすが、レンのことは丸々お見通しのごとく言い当ててしまうフウナ。
「それはもういいから早くしてよね。それに、今日は久しぶりに依頼が入ってきたんだよ！」
「荷台が？何台？」
「依頼が！！」
依頼、という言葉を聞いたレンのズキズキする頭の中に、一筋の光明が差しこんだ。
「しかも3件もだよ？みんなにも知らせなくちゃいけないから、絶対にお早めにっ」

それだけ言うと、再びドアを乱暴に閉めて、何処へともなくいってしまった。
起きた直後と比べて俄然やる気の湧いてきたレンは、常備薬ともいえる頭痛薬２錠を水で流し込み、カーテンをめくって小窓に立つ日時計をチラ見する。
ん？…午前、１１時と……３０分くらい？
言い忘れていたが、フウナは超がつくほどの天然だ。

上の命令（前書き）

お世話になっております、馬チョウ雲です。

今回の話から、ガンガンキャラクターを出していきたいと思っています。

話を読んでいただくうえで、だれか1人でも好きなキャラクターをつくっていただけるよう、キャラづけをしっかりやっていきたいです。

では、お楽しみください。

上の命令

「ほう、こんなお早い時間にお目覚めか。勤勉なことだ」
とにかく胃袋に何か餌を与えてやらんことにはぶっ倒れてしまう、と危険を感じたレンは、昼食が用意されている食堂に朝食をとりに来たところだった。
もちろんだが周りに朝食を食べている人間など見当たるワケもなく、頭をポリポリとかいたところに飛んできた悪態である。
「いやぁ、ほめたって何もおごらねえからな？」
仕方なく、せっせと昼ご飯を作っているおばちゃんに昼食を1セットもらい、ずらっと並ぶ長机の向こうにいる悪態をついたヤツ、コアの真正面に腰を下ろした。
コアはオレと同じ隊長職で、確か今年で32のオジサマ。何気に腕が立つらしく、というかそうでないとこんな職には就かないけど、厳しい眦がすこし周りとの間に壁を作ってしまっている残念な方。
それでも信頼は厚いらしい…。
前髪の真ん中だけが白くなっていることがきっかけで、「あれはあそこだけ黒く染めてないのか、はたまたあそこだけ白くしたのか」という議論を下級兵たちの間に広げてしまっている。
本人は全く知らないけども。
「で、今日はコアのトコが兵練日のハズだろ？サボってんのか」
さっそく一口めをつける前に文句を返しておく。やられっぱなしのオレじゃないんだ。
「そんな訳はあるまい。どこぞの常習犯と一緒にするな。俺たちはすでに訓練を終わらせ、休憩しているところだ」
貴様の反抗程度、見え透いているわ。といった感じにさげすんだ眼を向けるコア。
「その割にほかの奴らが見えねえけど…嫌われてんじゃねえのか、アンタ」

会話の間に食事をかっ込んだり、周りをぐるっと見渡したり、コアの顔を睨みつけてやったり……、自分でも消化に良くないと思う。
「お前を恐れて食堂に近づけんのだ。遅刻癖が感染するといかんからな」
「そいじゃ、アンタはもう重症だな。さっさとベッドに行けメイドに看取ってもらえ早々と逝け」
「俺はお前の軟弱な菌などにやられはせん。それこそ兵練場で鍛えたらどうだ？」
「甘ぇよ。オレは食事から制限して菌を育ててんだ。朝食を食べられな…食べなかったのもそのためだ」
「そんなら俺は部隊に手洗いうがいを徹底させて一歩も入り込む余地を与えん。どうだ悔しいだろう」
「手洗いとうがいだけでとれるほどオレの菌は尻軽じゃねぇ。ガンコ汚れのごとくまとわりついてやるよ」
「…何言ってるのよあなたたち…」
オレの後ろで、ため息交じりの女性の声が聞こえた。
オレとコアの醜い舌戦を止め、そのうえオレに昼食最後の一口を口に運ぶチャンスを与えてくれたのは、ついさっき会っていつの間にか消えていったフウナだった。
くちびるをとがらせて、腕を腰に当ていかにも「仕方のない子たちね」といいだしそうな雰囲気である。
「おぉ、これはフウナ将軍！今日もとても良い日和ですな」
コアは襟を正しながら起立し、フウナに深く腰を折って礼をした。
これでもフウナはオレやコアの隊長より上の、将軍職なんだ。
「そうね、コアさん。とても気持ちいいです…けど、早く食べないと料理が冷めてしまいますよ」
見れば、ヤツのプレートの上にはまだ半分以上おかずやらごはんやらが残っている。オレとの舌戦に気を取られていたからまったく食べることを忘れていたんだろう。

…ここでレンは内心コアに勝った気になった。

「はっは、そうでしたな、それでは失礼して…」

さっきまでレンと喧嘩していたコアとは全く違い、熟練の一戦士であるコアがそこには座っていた。

コアも、実力のある人間は素直に認める素直さを持ち合わせており、かつ自分の上司であるフウナに対しては反抗するどころか敬服の意しか示さない。

もちろん同職の、レンを含めた隊長たちやほかの人間に対しても然りなのだが、なぜかレンもそうであるようにコアはレンがあまり好きではなさそうである。

犬猿の仲と言えばそうだが、レンにとってはとっつきにくいオジサマといった印象だ。

フウナもそんなコアを知っているので、あえてそれ以上の口論には口を出さないでいる。

「…ところでレンさん」

「おぅ」

「…っ！」

オレの返答にコアの目がつりあがるが、幼馴染に敬語を使わなくてはいけない理由はない。

よく公私混同するなって言われるんだが、んなもん知ったこっちゃない。

「お話があります。一緒に来てもらえますね？」

フウナはいつもレンに「提案」ではなく「強制」をさせる。

上司に「ちょっと俺んとこまでこいや」と言われて断れる部下はそうそういるハズもないのだが。

ともあれ、今の強制案にコアがほくそ笑んだのは言うまでもない。

これで仕置きでもくらってしまえ、とでも思っているんだろう。

でも今までに何回も見てきてるあの顔は…何度見てもムカつく。

オレは返事を待つことをしないフウナに引きずられて食堂を出るま

で、絶対にコアから視線を外さなかった。

「あのー、何の話があるんでしょうか、将軍？」
（引きずられる）道行の中、すれ違う人たちは、はじめフウナに敬礼をし、その直後にとおる男を見、敬礼の恰好のまま目を大きく見開くという面白い反応を示してくれる。
さすがにこんなに人目が多いところでタメ口を叩くわけにもいかず、しかたなく使い慣れない敬語を駆使してるんだ。
しばらくは何も言わないままにレンを引きずっていたフウナだが、歩いて歩いてたどり着いた、そこらの兵たちの部屋とは別格の将軍の自室の前でふと立ち止まる。と、
「…もう、早く着てって言ったでしょ！？なんですぐに来てくれないのっっ」
天井からほこりが落ちてきそうなほどの大きな声で、オレに対する文句をぶちまけた。
補足として、将軍にもなると、自室の周りにはほとんどほかの部屋などない、一等地とも呼べる場所に部屋を構えられるのだが、いかんせん一人でいるのが怖いらしいフウナはほとんど自室にも寄り付かない。
そのためメイドたちも半年に一回の大掃除の際にも天井までその手を伸ばさない。
天井からほこり云々は、あながちウソではなかったりする。

周りに迷惑がかからないならいくら大きな声を出してもいいだろう…。
フウナはそう思ってか思わずか、朝よりボリュームを5ほど大きくして怒鳴りつけてくる。
「ちょ、待てって。さっきお前が呼びに来てからまだ1時間も経ってないんだぞ？そんなはやくから出来るわけがないだろう。いくら

オレだって支度する時間はあんだから」
「将軍の命令は絶対よ！」
城にいて、かつわがままを聞いてほしいときは例外なくフウナは今の言葉をお使いになる。
職権乱用も甚だしいだろう。ちぇっ。
ここで反論しても無駄だというのはこの十数年間通してわかりきっていたので、大人なオレは身を引いてやる。
「けっ、悪かったです！…これでいいだろ？」
「それじゃ、今度埋め合わせよろしくねっ。私美味しそうなお店見つけちゃったんだー」
「はぁ？なんでそこまでやんなくちゃ…」
「将軍の命れ」
「クソッタレ！」
フウナは楽しそうに口に手をやってクスクス笑っているが、オレは到底そこまでの彼女の心境を察せない。
コイツの見つける「美味しそうなお店」は本当に味はいいんだけど、おそろしく高級な店が大抵で、一部隊の長程度のオレの給金だけでは腰が自然と引けてしまうほどなんだ。
そう、「一部隊の長程度の給金だけ」なら。

着替えに部屋に入った（本当は別の部屋に着替えが置いてあるのだが、本当にお気に入りの服は自室においてあるらしい。だったら最初から全部ここで着替えろや）フウナを待つ。
ったく、女ってのは支度に手間取るのが趣味なのか？
ガチャっ。
お、今日はそうでなかったか？
レンは、着替えて若干大人っぽく見えるようになったフウナに視線

を合わせ、軽く手を振る。
「ホレ、さっさといこうぜ。丁度オレんとこは今日非番だから問題ない」
「それくらい知ってるよ。一応ここでは私のほうが上なんだから、部下の情報を知っておくのは当たり前よ」
部屋の中から鍵束をジャラジャラ言わせて取ってきたフウナのこの得意そうな顔…。
……。
うん、かわいいから許す。
「で、城には？」
「イヴとラエモンドがいてくれるから大丈夫。それに珍しくルカも城のほうにいなくちゃいけないらしくって、ふざけんなって嘆いてたわ。もちろん、私は夜に交代するけどね」
「そか」
非常時に対応できるように、長官以上の人間が常に2人は城にいなくてはならないので、フウナなどが外出するときには結構面倒な手続きが必要なのである。
他にも煩雑なルールはある。警備隊は担当以外でも次週の隊の人員は城に待機していないといけないとか、軍隊は週交替で訓練日を設定するが、有事の時に備えて常にお互いを鼓舞しあい城待機をしなくてはいけないとか。
だがあくまでもこれは外面的なことであって、実際はあまりみんな気にしていない。
フウナは少し心配性なところがあり、なおかつ城にはうるさいヤツもいるからここまで気にしているだけという話だ。
「レンはこっちに来るの久しぶりだから、みんな喜ぶと思うよ？」
壁に蝋燭のともる階段を下る途中、気になることを言い出したフウナ。
「…ちょっとまて、お前そんなに頻繁に城抜け出してたのか？」

「エへへ…」
オレは小さくため息をついた後、着替えて大人っぽく見えるようになった（あくまでも見えるようになった）フウナと一緒に城下町に繰り出した。
これは、断じて職務怠慢ではない。

裏の酒場（前書き）

こんにちは、馬チョウ雲です。
えー、ブログを始めました！
ちょっとＵＲＬ張ったので、よければ見に来てください！

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

小説を書いていらっしゃる方は特に必見だと勝手に思っていますが、
それ以外の方でももちろん大歓迎です！

で、本文の方ですが、ちょっと３話としての量の割り振りを間違えてしまって、見る分には何ら問題はないんですが、次の４話と合わせてやっと１話、みたいな感じの量になってしまいました。
もうちょっとよく考えて書いていきたいと思います。
それではお楽しみください。

裏の酒場

1時を回るころ、オレとフウナは2人ならんでメインストリート沿いにある「ソウルシーフ」という中2くさいネーミングの酒場の入り口に突っ立っていた。
ジリジリ熱い日差しが背後から照り付けて、砂や砂利の剥き出しな地面から熱が上がってくるが、かといって店に入るワケにもいかない。
酒場というものは大体夕方から翌朝までが営業時間であって、ここもつい数時間前まで酔っぱらいの処理に追われていたハズだ。
その名残として、ちょっと横を向けば酔っ払いがほかの店の壁にもたれて眠りこけていたりする。
もちろん、ここがフウナの言う「美味しいお店」ではない。
「おーい、開けてくれって！こちとら熱いんだよおおぉオ！」
暑さに耐えきれず、とても営業時間外に来た客のものとは思えない厚かましセリフをのたうつレン。
もしここに気の短い店主がいたなら、両手に包丁を持ってたっぷり報復してくれるだろうと横にいるフウナが危機づくほど危ないセリフを吐いている。
しばらく胸の高さにあるスイングドアをドンドン叩いている（叩いているのはレンだけで、フウナは他人のふりをしている）と、レンの足元、スイングドアの下にのぞく丸椅子の山が一つずつどけられ、閂のあく音がしたかと思えば、ギギッと軽く木の扉が奥に開いた。
いよいよ二振りの包丁かと思えば、そこからのぞいたのは予想を大きく裏切る、とても大人びた美人さんであった。今しがた中を片付けているのか、着ている服が少し汚れ、疲れた表情も見せているが、中身の美貌に比べればそんな小さなこともあまり気にならないほどキレイなのだが、失礼な客の横暴によってそれも若干減じている。
うんざりしたように金色の長い髪をわしゃわしゃかいて、

「はい！聞こえてますって。営業時間の看板見えませんか？今は…」
まだ時間外です、という前に、レンの顔を見てはっとした様子の美人さん。いつの間にかフウナもレンの横につき、彼女の存在をも認めた美人さんは確信をもって叫んだ。
「レンさん！待ってたんですよ！？…それにフウナさん、ご苦労様です」
「おぅ、久しぶりだな」
「大丈夫よ、これも私の仕事の一つだしね」
ペコリと頭を下げているこの店の看板娘シルタは先までの疲れた顔をひっこめたあと、いそいそと慣れた手つきで2人を木造の建物の中に招き入れ、また閂をしっかりとしめた。
一気に店内が暗くなったが、不意に明るい光が部屋をパッと照らし出す。シルタが小さな横窓を開けたのだ。

酒場というものは昼間は入れないのが通例だ。
だがすべてが木でできている店内は総じて落ち着いた雰囲気で、カウンターと机、合わせて３０席ほどの小さなところだが、夜はいつでも立ち飲みをする客がいるほど人気がある。
そんな喧騒が広がるところなのに、柔らかい日差しが1本、2本差し込むだけでこうも違うものなのか…。

と、レンはどこかで読んだ酒場案内に書かれていたのを思い出した。
柔らかい？とんでもねぇ、クソ熱いだろうがよ……。
酒のにおいが染みついた店内を愛しむように眺めるシルタを見て、レンはふっとため息をつく。
そのシルタは窓を開けた後カウンターの向こう側に入り、カチャカチャとグラスを洗い出した。今から開店に向けて仕込みを始めるんだろう。エプロンをつければそれなりにらしく見えるんだろうが、生憎酒場はエプロンが似合う場所ではない。
レンの横で、床に転がっていた丸椅子を机の上にあげていたフウナ

は、カウンターに立つシルタにいぶかしむような顔で向き直った。
「……シルタちゃん、たしか昨日も当番だったんでしょ？疲れてるだろうに…ダンは？」
「ダンさんは、疲りた～。シルタちゃん、悪ぃけど仕込までやっといてくんねーかな？と言って今下で寝てます」
全然気にしてませんよ、といいたげに笑顔を作るシルタだが、フウナはちょっとカチンと来てしまったようだ。
「行くわよ、レン」
「シルタ、オレ、キツめの一杯」
「レン！！！」
「わぁーってるって！冗談！」
オレの耳をつねるフウナは、なぜか心無し嬉しそうに見える。
コイツ、新しい世界に目覚めちまったのか？
「ふふふ…。フウナさん、すごく嬉しいんですよ。レンさんがここ1週間いらっしゃってなかったから…」
皿洗い中のシルタが金色の目を細めてにっこりと笑う。いや、結構笑い事じゃない痛さだよ？コレ。
「シルタちゃん！余計なこと言わないで！」
そのついでにフウナはオレの頭をベシンと叩いた。なんでオレ？？

「先に行っててください。仕込みが終わったら私もすぐに行きますので…」
「分かったわ。…だけどねシルタちゃん、嫌なことは嫌って言っていいのよ？ダンには言っておくから…」
言うなりフウナは腰につけてあった鍵束の中から、迷うことなく一本を選び出し、カウンター横のこれまた木製のドアの鍵穴に差し込んだ。ちなみにこの時もオレの耳はフウナの左手につままれている。
カチャッ。

フウナの手に確かな感触がして、先ほどとは違い音を立てずに滑るようにドアが開くと、そこには階下へ続く階段があった。ホコリ一つ落ちていない、よく掃除の行き届いた階段だ。
ここでようやくレンの耳が解放される。
「心配はいりませんよ。これでもダンさんは頑張ってくれてるんです」
「そう？無理しちゃダメだからね？」
「シルタ、なるべく早くな」
先にフウナが降り、それにオレが続くが、オレの催促にシルタがふふっと笑う。
「？どうした？」
「レンさんの仕事の前の顔、…そう、今もですけど、とってもかっこいいんですよ。だからフウナさんもあんなに喜んでたんです」
「へぇ？そうなのか…っと、誘惑はしちゃいかんなぁ。悪いがオレは未成年は守備範囲外…」
「レンさん！」
一気に笑顔が消えて真っ赤になったシルタを尻目に、レンは転げ落ちたのかと思うくらいの速さで長い階段を駆け下りた。実際、明かりが一つもついていない階段はひどく足を踏み外しやすく、下までたどり着いたレンは心臓が口から飛び出るかと思っていた。

もわっ
という効果音が似合う部屋といえば、まさにココだろう。
換気をしろと言っているのにも関わらず、誰もそのことを覚えていない。とフウナが嘆くのもわかる。もわっとしてるだけならまだしも、ガヤガヤうるせーから聞こえるハズもねーんだ。
あっと地下一階。
ここは限られた人間しか入ることができない、いわば秘密の部屋。

フウナが腰につけていた鍵束は、鍵を盗まれても安易には忍び込まれないための措置で、普段は裏口からここには入る。
オレやフウナはめんどくさいから表から入ってるんだけど…。

秘密の部屋、といえば聞こえは荘厳なのに、その荘厳さを帳消しにして倍余るほどうるさいし小汚い。
レンたちの右側、部屋の隅には酒樽で作られた山が、低くもない天井近くまでつみあがっており、ここが元は酒蔵であることを髣髴させる。
上の酒場と同じ規格の机と丸椅子が無造作に置かれ、そのほとんどはどこかが欠けているか必要以上に汚れている。それに上の酒場以上に酒臭さが床、壁、天井に染みついているから慣れないうちはここにいるだけで酔うだろう。
レンたち以外にも生き物は十数人おり、それらの人たちは床にうつぶせているかタル山にぐでっているか、机の上に突っ伏している。
要するに寝ているのだ。
もちろんこんな時間なので全員が寝ていることもなく、十数人のうちの限られた数人はまだ無事な机の上で絵札を並べて賭け事をしていた。
一言でいえば、かなり広い寝室のような感じだ。
もちろんレンとフウナが同時に頭を抱えたのは言うまでもない。
「…あっ、レンさん！？」
新しく賭け札を机の上に叩いた男がレンの存在に気づき、変に声を裏返した。
それに反応し、起きていた人間全員がこっちを振り向く。
おおっ。
という感じのどよめきの後、歓声が響いた。

開始の宴（前書き）

こんにちは、馬チョウ雲です。

今回は今までに比べて少し長めになっています。
一気に読み切るもよし、しおりはさんで休憩するもよしです。
でもこのくらいがちょうどいいのかな…。自分の中には満足感が残っています（笑）

それでは、お楽しみください
ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

開始の宴

そして気づけば部屋の隅のタル山のてっぺんに座らされていたレン。ここまでに１０分間たらいまわしにされていた事実があるが、それは伏せておこう。

タルは何段も何段も積まれているため、この一番上のタルのさらに上に立ち上がろうものなら、もう少しで天井に頭が届きそうになるくらいだ。
タル自体の形の変形もあって若干グラッとゆれたりするし、むわっとした空気がこの辺りはよどむことも多々あるが、ここからだとごみごみとしか見られなかった部屋の光景がパッと目につくので、レンは酒場にいるときは大体この位置に陣取っていることが多い。
相変わらず汚い景色しか目につかないけども。
そして…
「レーンちゃん！」
とか考えているうちに下からトントン拍子で軽々と上ってきた女性に声をかけられる。無駄に元気のよさそうな声だ。
オレはダンの耳をつねって引きずり回すフウナから視線を外して、今の声のした方を見た。
「よお、スタンか。悪いけどオレにも何か…」
「そういう思て、ちゃんと持ってきとるよ」
と、男の片手でようやく握れるくらいの太さのグラスを渡された。
これをジョッキというやつもいるが、それは違う。これは断じてグラス、グラスなんだ。
どこかジョッキと違って品があるじゃないか！！
中身は渡された振動で今にもこぼれそうなくらいなみなみとあり、なおかつドス黒いが、レンが気にするのは見た目でも味でもなく、度数である。

「さっすが、気が利くな」
「知っとる知っとる」
レンの座るタルの1段下に、スタンと呼ばれた小さな赤髪の女性が腰を落ち着けた。
おかっぱ頭がさらっと揺れ、細い足がパタパタ動くと、レンはいつも「やっぱコイツは15そこそこなんじゃねえのか？」と勘違いしてしまうほど若々しく映る。
実際はレンと同い年くらいなのだが…。
言わずともがな、スタンの手にも酒の入ったグラスがちゃんとおさまっている。
「なぁなぁ。なーんで最近こっちに来ぃひんかったんや？フウナちゃんもレンちゃんのこっちの顔が見れないーゆうて、へこんどったんよ？」
流暢な訛り言葉を発するスタンは、両手いっぱいにグラスを抱えて走り回るフウナ（とその後ろで手伝わされているダン）に目を向けたまま、レンと口をきいた。そして自分が一回話し終わるごとに、一口ずつ酒を口に流し込む。
レンもグラスの中を満足げに眺めて口元に運んだ。
「いやな、城での暮らしも楽じゃなくってなぁ。こんなことなら最初っからやんなけりゃよか……っくぅう！この酒キくなぁ！！」
少しこの酒を見くびっていたレンは不意を突かれて喉を焼かれた。
得意げにスタンが、
「せやろせやろ？ウチがみんなのためにとってきたんやで…。ココの地下3階はもう息苦しくてたまらんわぁ」
「つーことはなんだ、隠れて一人で利き酒でもしてたってのか？」
「ノーコメントや」
その時の苦労を思い出すように、スタンは目をつむる。よく見ると酒がすでにまわっているのか、髪だけでなくその小さな顔も赤い。
酔いにくいスタンがこの体たらくなら、ほかのやつらはもうベロンベロンなんじゃねぇのか？

こいつぁ、早急に仕事の話をしなくっちゃな…！！
と思うような勤勉さはレンにはあらず、特に何の考えもなく起きているみんなと一緒に乾杯の音頭を取った。
「よーしお前ら、酒持ったか？じゃ、かんぱーーい！！」
「かんぱーーい！！」
寝ていた奴らも、この騒々しい号令に起きるしかなかった。

「よ、よーし。お前ら、お仕事の話だ……」
「はーい……」
タル山の下におろされて情けない声で指示を出すレンと、床一面に正座させられている、部屋にいた人間たちの右のほっぺたが全員赤くなっている。
ともに2時間もの間酒盛りしまくった挙句に眠りこけた罰を食らったあとである。
そして、「ほっぺたねじりあげの刑」を執行した張本人、フウナが、ちゃんと正座しているか厳しくチェックし（「そこ背筋伸ばす！！ちゃんと反省してるの！？」「は、はいぃぃっ」）、手を伸ばしたウォールポケットの中から3枚の紙切れをレンに差し出した。
（ちなみにこの時「お待たせしまし…」と語尾を消したシルタが静かに入室。）
無論、その短い間さえも他に声を出す人間など1人もいるワケなく、レンも心無しかビクビクしながらその紙を受け取り（「レン、気持ちが上がるのはわかるけど、しっかりけじめつけなきゃだめだよ？」「は、はい…」）、1枚目を開いた。

とたん、レンの顔つきは変わる。

酔ってへべれけだっただらしないレンは見る影もなく、鋭い眼光を宿す獣のような、今までの適当さがすべて吹き飛んでしまったよう

な雰囲気であった。
ここで、フウナをはじめとした数人の女性はほぅっ…と恍惚の表情を浮かべる。
床に並ぶ正座ーズも、どうしようもない見た目の割に、真剣なまなざしや羨望の視線をレンに向けている。
2枚目をさっと読み終わり、3枚目に手をかけ、レンは少し目をほそめた。
その動きは些細なものだったが、部屋にいる男女たちはそろって息をのむほど、その動きに気付かない者はいなかった。
それほど、今のレンは気を張っているということだ。
ふいに、レンが紙を下し、
「依頼の内容を確認した」
というと、さっきまでの張りつめた空気が和らいだ気がした。あからさまにはぁぁとため息をつく奴もいるし、どこか表情が緩む奴もいる。ったく、オレだって結構真剣になるときくらいあるんだぜ？
「…えっとな、大雑把にいうと、偵察任務が1件、お宝情報が1件」
後者を述べるとき、みんなの顔がパッと明るくなる。
「で、最後のは奪還任務だ」

ここまで言うと、正座ーズ…もとい、ギルドメンバーは音もなく一拍のもとに立ち上がった。
特段意味のない行動だが、裏を返せば何も言わずとも全員の気持ちが一つになっているということだ。

「オレの見立てで、偵察に2人、お宝2人、奪還3人！んで、今回の偵察任務に関してはオレが推薦した奴がいってくれ。偵察にトルメヤとアキ！アキは初めてだろ？トルメヤ、色々と教えてやってくれ。詳しい内容はここに書いてあるから、後で持ってけ」
「もちろんです」
「はいっ」

それぞれトルメヤとアキと呼ばれた2人が返事をしたかと思えば、レンはテキパキと次の指示を出していく。
しかし、レンに呼ばれた2人以外のメンバーはなぜかがっくりと肩を落とす者が多かった。
どうも、レンのお呼びになりたかったらしい。
「ほかは…希望者で大丈夫かな。誰か」
「お宝！」
間髪入れずに手を挙げたのは、先の赤髪の女性、スタンだった。
大きな目を爛々と輝かせているスタンは、昔からこの手の依頼を片っ端から受けているのだが、勝率としては5分5分といったところである。
こういう情報はガセが多いが、現場に行ってみないとわからないモノが大抵なので、レンは無駄足を踏んだスタンにたびたび申し訳ないと思っている。
ほかには希望をする人間がいなかったので、レンは頃合いを見て、
「んじゃスタンと…。サボった罪のあるダン！お前行け」
「ああっ？俺ですか？……わかりましたよ」
酒場の仕込みをすべて年下のシルタにやらせる甲斐性無しのダンも、レンにだけは素直である。今ばかりはその豪放磊落な性格もナリをひそめているようだ。頭をガリガリかいて欠伸までして、「めんどくせーなー」ということを全身でアピールするが、少しは後ろめたい気持ちがあるのか、何も言うことはなくしぶしぶ支度を始めた。
「最後！奪還依頼の方だが…」
3枚目の紙を上から下までじっくりと見ていくレン。
「おそらく予想じゃ、最近ここらで頻発してるコソ泥たちの仕業だろうな。そんなに気ぃ張らなくてもいい仕事だと思うんだが…」
言葉の最後を濁すレンに、みんなが不安な表情を浮かべる。
良くも悪くも、このギルドはレンを中心によくまとまっている証拠である。
「報酬としての金額が、盗まれたものに対して高すぎる気がする。

なるべく早急に取り戻して、そいつについて調べたいところだ…。
近頃はロクに動いてないし、これにはオレがいこう」

ざわっ。

オレが行く、という点にメンバーがこれもそろってざわつく。レンが出るということは、そんなに重要なことなのだろうか…。と少なからず思われたためであろう。
何せ、レンは義賊団「黒の閃光」を束ねる、マスターなのだ。城では格上のフウナも、ここでは「将軍の…」などとはおくびにもださない。
当の本人は「ちょっと体動かさないとなまっちまうからな」程度にしか思っていないが、彼を尊敬する団員たちにとってはこれは大事である。
「まぁ砕けて言うとさっさと取り戻したい、ってことだ…。誰か、ついてきてく」
「はいっっ」
「お、俺が行きます！！」
「えー！だったらウチそっちに行きたい～！」
「あたし！あたし行きますよ！」
「…レン、私が一緒じゃダメ？」
一挙にそこにいたフウナも含める全員が声を合わせて挙手した。
……ものすごい人気ぶりがあることに、レンは気づいていなかったりする。
「おぅおぅおぅ、物好きもいるモンだな。そんなに楽しい任務でもないと思うぞ？」
まるで見当違いの方向に今の挙手を解釈しているレン。こういうのも、主に女性メンバーから好かれている点。
「じゃま、テキトーに…」
一度目を閉じてから、パッと目を開く。

「最初に目に入ったリリーナとシーブ！準備してくれ」
「やたっ」
「は、はいっ」
透き通るような青髪を短めにポニーテールにまとめた女性と、黒髪に白だか銀だの模様がはいっている「はっちゃけ盛り」を具現化したような青年が喜びながら呼びかけにこたえた。
2人とも、壁にかかっている自分の装備を手に取ると、すぐさまレンの眼前に並んだ。
すでに頬が紅潮し、興奮しているのが見て取れる。
「後のやつらはいつもの通り、留守番を頼んだぜ？」
選ばれずに意気消沈していたほかのメンバーたちも、今のさりげない気遣いの言葉で少しやる気を取り戻したようだ。
レンはタル山に置いた2枚の紙をトルメヤとスタンに渡し、いくばくかのひそひそ話をしたあと送り出した。
「レン。先に外に出てるよ？」
「あぁ、すぐ行く」
部屋を先行している4人に続いて、リリーナとシーブも裏口へ向けて歩きはじめる。
「…フウナ」
「…うん？」
周りに人が少なくなったのを確認して、テンションの下がっていたフウナを呼んだ。
とぼ…とぼ…。
見ているこっちが申し訳なるくらいにテンションがガタ落ちしている。
「あ、あー…。悪かったな。フウナは今日の夜警備交代なんだろ？」
「…そんなの休んでやるもん」
「はは…。将軍様がそんなことといっちゃいかんさ」
レンは、ぽんっとフウナの頭に左手を乗っけた…ついでに、みんなに見られないように右手で残りの1枚の紙を彼女の服の中に滑り込

ませた。
「？」
「この依頼人について調べあげといてくれ。それと、城の方、ホントにやすんだりするなよ？」
「平気よ。…ちょっとやる気も出たし」
レン直々の頼み、というところでフウナも復活したようだ。
「留守番も重要な任務の一つ、ですよね、マスター？」
「よくわかってんじゃねえか」
ニヤッとレンが笑うと、少し悲しげな顔でフウナも無理してお追従笑い。

この時フウナの心には、レンの昔の姿が浮かんだ…。

「…気を付けてね？」
「あぁ、いらない心配さ」

仕事の前哨戦（前書き）

こんばんは、馬チョウ雲です。
実は私は、この５話目まではあらかじめ紙に書きためておいた分の小説を打っただけでして、比較的更新は早かったんですね。
ですが、この回でその書き溜めた分は終わり、つまり次からは一からパソコンとにらめっこするわけです。
というわけで、次回からは今までよりも更新が遅くなることが予測されます…が、皆様の変わらぬご愛玩を（？）お願いしたい所存です。
どうかこれからも見捨てずにやってください。
ランキングタグが２つに増えました！
そんなに大差はないのですが、両方押していただければ幸いです
ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

仕事の前哨戦

日も傾きだし、日陰の面積が増えてくる時間帯が、オレたちの仕事の開幕時間だ。
地下から通じる専用の抜け穴を通り、この辺りに住んでいる人しか知らないくらいに人通りの少ない極細裏通りへと出てくると、先に出ていたリリーナとシーブがオレを出迎えてくれた。
「レンさん、今日はよろしくお願いします！」
開口一番仕事熱心さをうかがわせるこの男は、まだ入団1年目の新参者、シーブ。
たぶんオレと一緒の任務は初めて…のハズ。
「レンと一緒に仕事できるなんて、1年目にしてはすごいことよね…改めて思うけど」
「いや、おまえだってまだ3年目だろ？」
「え、覚えててくれてるの…？キャー！！」
怪しい踊りをしだしたこの女がリリーナ。入団するまで色町で働いてたってーけど、それを聞くのは野暮ってモンだろ。
隠し戸を後ろ手に閉めながら、レンはマントを巻き付け直した。
「それで、あたしたちは何をするの？」
ウズウズしているのか小さくジャンプまでしだしたリリーナ。
人が2人並んで歩けるかどうかの道幅しかないここで踊っていると、たいそう…
邪魔なんだ。
ということは言わずにおいて、楽しみなのかもしれないけど、と前置きをして、
「浮かれてると足元すくわれるぞ。気をつけろよ」
「うっ…。わかった」
しょぼん、としたリリーナの顔は、今にも泣きだしそうなくらいに崩れかかっていた。

オ、オレはそんなにひどいこと言ったのか？
「……まぁ仕事の内容は歩きながら話すとしよう。オレが後ろ見るから、表に出たら横並びでシーブがちょっと前に出ろ。どこでだれが目を光らせてるかわからないからな、いつでも気を張ってろよ？」
「はい」
「…うん」
レンの真顔は、特に凄んでもないのに人を黙らせたり注目を集めることができる。
…裏を返せば、普段はほとんど真面目ではないということだが。

表通りに出た。
左を見ればレンやフウナが毎日お勤めしているエクシン城が割かし近くに、右を見れば道幅１０メートルはあるメインストリートが長〜く続いている。この道の途中では、ひし形をしている都市の形に合わせるように、メインストリートもひし形に分かれ、それぞれの辺にあたる部分の道には名前がついている。だが、この都市の真ん中を貫くメインストリートは、名前もメインストリートである。
ここエクシンは城はもちろん、町までも戦闘用に使える塀で囲んだ城塞都市で、城の周りにももう１つ外を囲む塀以上の高さの壁がはばんでいる。
つまりこの都市を上空から見れば、一番外を覆う塀によるひし形、次にメインストリート形作られているひし形、最後に城の周りを覆うひし形の壁、と、３重のひし形に囲まれているわけだ。
外と中を行きかいできる入口はこのメインストリートを果てなく南…。つまり右へ行かなくては無い、まさに鉄壁の都市である。
で、つい最近まではその鉄壁の都市が脅かされるようなことは建国以来ありえなかったんだよなぁ。
「…レンさん？」

「っ」
っと、余計なことを考えすぎてたかな。
「あぁ、悪かった。…しっかし、まだ動くまでには時間がたっぷりあるし、作戦も立ててねーし、どこかでメシ食って時間つぶそうや」
「はい！」
「あたしレンの隣に座る！」
「えぇ、リリーナ！それはずるいよ！」
「子供かお前らは…」
「あたしは子供だ！」
「…そうか」
苦笑いするレンだが、悪い気はしていないのはあの表情からすぐに読み取れる。

仲間がいると楽しいことこの上ない。とレンは思っているが、もちろんそれを言うはずがない。

件の人気者は、マントの下をごそごそ言わせながら財布を探す。
「…お、喜べお前ら。今日のオレの財布の中には…なんと5万ヴェンもはいっていた！何でも好きなモンを食え！」
「やったぁ！太っ腹です！」
3人でこうして表通りでピョンピョコ跳ねていると、嫌でも町行く人の視線が集まる。
我ながら、何をしてるんだろう…と感じてしまった。

好奇の視線は痛いモノだなぁと、レンが感じ始めたころ。
シーブとリリーナの恥ずかしがる顔に気付いて、ようやく跳躍を止める気になった。
「…コホン、気を取り直して、行くとすっか。シーブ、前」
ようやく恥ずかしい行為をやめて、あらかじめ決めた位置で歩き始めた。

とたん。

2人の少し後ろを足取り軽く歩くレンが、リリーナの耳がかすかに動くのを見た。

申し合わせたかのようにシーブも立ち止り、レンの方を向く。

「レンさん、今…」

リリーナも振り返り、

「悲鳴が…」

「聞こえたよ」

レンは困った顔で言葉をつないだ。

盗賊は常人よりもはるかに五感が優れていて、今のような、周りの人が気付かなくても自分たちだけにはある音が聞こえる、ということがよくある。

「どうするの…？」

レンは悲鳴の聞こえた、右前方に位置する大通り、ミズールフ通りの地理を考え、すぐさま指示を下す。

「…オレとリリーナで行く。シーブ、お前は少し離れたところからオレ達と周りを注意してみてろ。絶対に誰にも見つかるなよ」

「…はい！」

「行くぞ！」

「はっはぁ！逃げろぉ！！」

「こ、このっ、クソガキどもぉおお！！」

クソガキ、と呼んでいい年頃か迷うくらいの青年と女性たちが４人でエクシンの町の一角を疾走している。

彼ら彼女らの背後数十メートルの位置には、道に転ぶ老婆と、勇ましく「クソガキどもぉおお！！」と狼藉者を追いかける夫とみられる老翁が、悲痛に叫んで助けを求めている。

助けを求める、というより、自分でとどめを刺したがっているように見えるのはたぶん気のせいだ。
「クソガキどもぉおお！！」
「あっ。くそっ、お前ら、待てええええぇぇぇぇ……」
ひし形の道の一辺、ミズールフ通りから一本外側に外れた道といえども、ここは住宅の密集する土地だ。人の目もたくさんあるし、当然正義感あふれる若者もいる。後者の威勢のいい掛け声はその人のものなのだが…。
しかし、その不届き青年たちは全員が全員足の速さが尋常ではなく、体格のいい若者も、とてもではないが距離を縮めることができていない。
4人はまったくの私服姿で、遊んでいる途中に気分がエスカレートでもしたのだろうか。それに酒に酔っているようにも見え、ときたま千鳥足のまま走ることもある。
女の人も髪を振り乱して全力で走り、
「おいタカ！それいくらはいってんのよ？？」
「まてよ、もうちょっとむこう行ってからにしようぜ！」
女の人がタカと呼んだ男の手元に、どうみても若者の趣味には合わなそうな質素な柄の財布と、残りの2人が走りながら中身を見ている小さな手提げカバンが見える。
こいつらはどうやらあそこの老夫婦からカバンごとひったくったみたいだな。

と、6階建ての物見櫓の更に上の屋根に伏せているシーブは結論付けた。
盗賊にとって道などあって無いようなもので、レンたちと別れて直ぐに裏道に入った後、言われた通り周りに気を付けながら屋根の上に登り、悲鳴の聞こえた方へと音もなく駆けつけたのだ。
この位置からミズールフ通り1本をはさんだ向こう側で、さらに低い建物が道沿いに並んでいる間にある細めの住宅道だろうと、この

高さならギリギリ見える。
本来なら自分があの青年たちを成敗してくれるところだが、レンに絶対に見つかるなと言い含められていることをずっと胸にとどめ、こうして眺めるだけの行為に徹している。
（「レンさんたちは俺の後ろ側らくるはず…ってことは、俺もあっちに移動してた方がいいな」）
まだまだ余力がありそうな青年たちと、すでに息の切れた若者。威勢のいい爺さんに、犯行現場を目の当たりにして腰の抜けている買い物客たちから目を切り、シーブはメインストリートとミズールフ通りがぶつかり合う交差点へと猫のように走っていった。

「おいクロン！こっちは表通りだ、まずいぞ！」
「いいんだよこっちで！どうせあの通りの声なんざ聞こえてねえって！」
４人を先導する坊ちゃんカットのクロンは、砂を巻き上げながら表通りとの交差点に入ろうとする。
生まれてこのかた「温室育ち」を貫かれていたクロンは、親に反抗してみたい、というただ一事のみで、仲間３人とつるんでひったくりを繰り返している。
一緒に悪事を働く３人は、ともに同じお坊ちゃま学校で育った温室仲間で、必要なものは何から何まで買い与えられ、必要なことも何から何までこなされてきた。
この世では弱いものが死んで、強いものが生き残るという弱肉強食式の考えが彼らの頭の中の考え方の大元であり、それだけならまだ問題にはならないが、その力のすべては「金、権力」であると信じてやまない輩たちだ。
しかしそんな自分たちでも反抗期というものは訪れ、それは、犯罪を犯すことで自分の自立を親に知らしめたい、という歪んだものであった。
クロンは、自分が間違っているとは思っていない。ただ、自分たち

が強く、さっきの老人たちが弱い、というただそれだけのことである。

ともあれ住宅道からミズールフ通りに飛び出た４人。やはりあんな道での悲鳴は立ち並ぶ住宅に阻まれてこっちまで届いてないと見え、みなのんびりした顔で夕げの食材を抱えて家路についている。
クロンは一瞬だけ後ろを振り返り、ひったくったカバンをしっかりと脇に抱えなおした。
「どうする？」
黒いメガネをかけた茶髪の男が汗をかきながらクロンをせかす。
タカも同意のようで、歯を食いしばって焦りを隠しているようである。
「このままメインストリートに出るぞ。まさか俺達が人通りの多い方へ出るとは思わないだろ。隠れ家にも用心して戻らなくちゃいけないから、遠回りの方がいい」
「さっすがクロンね！あんたに任せるよ！」
せっかくの長い金髪がぐちゃぐちゃになってしまった女性が、無責任にクロンの肩をたたく。
「よし、早く逃げるぞ」
逃げるぞ、の部分だけ人に聞かれないように小さな声で話し、４人全員で全速力で右方向のメインストリートに向けて駆け出す。
こんな道で、何をそんなに急いでるんだ？といったような顔で見られたり、何回も正面から人にぶつかりそうになるが、そんな人たち全員に構っていたら俺達が危なくなる。
後ろから夕陽が自分たちを照らしているからか、全体的に後頭部から尻が熱い。それに、汗もシャツにしみ込んでとても着心地が悪い。
早く隠れ家に入って、シャワーを浴びよう。
「メインストリートを突っ切って、フレイスト通りに入るぞっ」
「あ、ああっ」
メインストリートまで１０メートル、といったところで後ろの３人

に指示を出した。
いいか親父、おふくろ。俺は、俺の好きなようにやるんだ。この仕事で手に入れた金で、あんたたちの元を去ってやる！
心の中で親に向けてそう叫んだあと、しゃにむに駆けることに集中した。
あと5メートル、みんな緊張してんのか？俺はむしろせいせいしてるぞ。
あと3メートル、金をもらったら新しく家を借りて、完全に自立する。親じゃなく、友達と一緒に楽しく暮らしてやる。
あと1メートル、人通りが多いな…。まぁいい。一気に突っ切ってやる！

あ？
なんでこんなに目の前が暗いんだ？

前哨戦の処理（前書き）

こんばんは、馬チョウ雲です。

第６話、始まるのですが、この回から自分としてはやっと面白く書ける回だと思っています。
なぜかと言えば！というのはネタバレに近いので言えませんが、とにかく見ていただき、見た感想をぜひ教えていただきたいです。あ、もちろん強制じゃありませんが（笑）
感想は小説家になろう様に登録していない方でも書ける仕様となっていますので、じゃんじゃんお願いします！
あと、アルファポリスバナーの種類が２つになったので、押すときは２つ別々に押していただけるとありがたいです。知っている方はすでに知っていたと思うので、重複失礼します。
では、お楽しみください

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

前哨戦の処理

力いっぱい走りこんできた奴の腹にすれ違いざまフックを叩き込めば、そりゃぁ気絶もするだろうなぁ。さっすがレンさんだ。

ミズールフ通りとメインストリートの交差点に建つ八百屋の屋根の上から現場を見下ろすシーブ。言いつけどおり、頭だけひょこっと出して絶対に見つからないように注意しているため、よっぽど注意して見られないことには気づかれないだろう。

クロンの体が力なく傾ぎ、レンの左手に落ちる。
ここで、やっと後ろを向いて走っていたりした随伴人の他3人がリーダーの異変に気付く。
「おっ、おい、クロン！」
「バカっ、止まれ！」
レンの肩に担がれたクロンを取り戻そうとタカは走りだしそうになるが、それをエィナが制止した。
前にたつ長身の男に、恐れをなしたのだ。

一方、長身の男。
反抗してきそうに身構える青年たちをチッと一瞥し、
「…リリーナ、コイツ持っててくれ。すぐ片づける」
「はい！」
完全に伸びているクロンを軽々とリリーナに渡したレンだが、受け取ったリリーナはあまりものコイツの重さによれよれっと膝を崩した。意識のない人間を担ぐのは容易ではないのだ。
改めて気合を入れなおしたリリーナは、ぞろぞろ集まりだしてレンたちを中心とした円を形成し始めた野次馬のそばにより、クロンを荒っぽく地面にほっぽった。

背中から落ち、その手からは小さなカバンがこぼれたが、相変わらず白目をむいたまま動く気配はない。リリーナはそれからクロンには一目もくれることなく、レンの方を心配そうに見つめだす。
「おい、てめぇら」
ちょうどそのとき、レンはまだまだ活きのよい若者たちに説教を始めた。
「まっさかとは思うが、お年寄りの人から何かを盗んだりしちゃいねえよな？でなきゃオレだってあんな手荒な真似はしないし」
親指で地面に倒れるクロンをくいっと指差す。しかもこの時は、わざとらしく大声で周りの人たちにも十分すぎるくらいに聞こえる音量で話している。案の定、もともとザワザワしていた野次馬たちも更にザワザワしだす。
「あいつら、そんなことしたのか？」という風に。
「ばっ、バカなこと言うんじゃねーよっ。俺たちは、かっ、買い物、頼まれて…」
「そうだよ！私たちの足じゃ閉店まで間に合わないから、代わりに行ってくれって…」
しどろもどろに、エィナとラライトが弁解する。当然、目が泳いで汗ダラダラの若者のこの言い分を信じる人は、ヤジたちの中にもいない。
レンは肩をすくめて、
「いいか、寝言っていうのはな、寝て言うから寝言っていうんだぞ。女の子を殴りたくはないが、素直じゃない女は嫌いでね。男は当たり前に大嫌いだが」
小憎らしい口調を作ると、周りの野次馬が大爆笑した。この空間で唯一のアウェイの3人は、死にそうなくらいに青ざめているか、死にそうなくらいに顔を赤らめているかのどちらかだ。
「つーわけで、今すぐ盗ったモンを出せばこのまま警備兵に突き出してやる、出さないってんなら殴って突き出す。どっちが…」
「アンタ、なんで私たちがそういう風に盗ったって言い切るんだよ

！証拠はあ」
「オレがしゃべってんだ！黙ってろ煮卵！！」
「に、に、にっ？」
ギャル風の女、エィナは一瞬開いた口がふさがらなかった。
我ながら痛烈な一言を言っちまったな…。女の子にだけは優しくいこうと思ったんだけど…。
もちろん観衆は先に次ぐ大爆笑で、肌が黒いだけで煮卵にされたエィナはさっきまでの死にそうなくらいに赤かった顔が、今度は怒りによって赤くなる。
「てっ、テメェェェ！これはオシャレなんだよ！わざと黒くしてんだよ！！」
「ほう？自虐趣味まであんのか。お前らも絡む女くらいは選んだ方がいいぞ」
死にそうなくらい顔の青かったタカとラライトも、今の言葉でカチンと来たようだ。
特に唯一反抗の構えを取っていたタカなどは、
「おいおい、そんなに余裕ぶっこいちゃっていいの？…ほら、見ろよ！」
と、腰につけていたポーチから、果物ナイフを取り出し、鞘を抜きはらってレンに向けた。

ザザザッ。

銀色に光る刃が、まっすぐレンの胸に向かっている。これがタカだけが反抗の気を見せていた理由だ。
調子に乗っていた空気が一挙に冷め、野次馬の円が二回りくらいは大きくなった。
さすがに刃物を取り出した人間をおちょくる気にはなれないのだろう、そのまま逃げだす人もいた。
…ただし、中には例外もいる。

「まいったね、ナイフを出しますか。…そこの八百屋でリンゴでも買って剥く練習くらいはさせてやるぞ」
レンは余裕たっぷりに腕組みして見下すように相手の男に向けて言い放った。
これにはリリーナも、その八百屋の上にいたシーブも必死で笑いをこらえるハメになる。
こりないのか、はるか後ろに下がった野次馬たちのなかにもクスクス笑うやつまでいた。
「ぐ…ぐっ…」
ナイフを持ったタカは、尋常でないくらいの汗をかき、足はもちろん手も震え、歯がカチカチ音を立てて鳴っている。
ここまでしてしまった以上、引き下がれないと思っているのだろう。
「おい、タカ！それはやりすぎだ！殺しちまったら、ここじゃ逃げらんないって！」
ラライトが汗でずれるメガネを直し、周りを確認しつつ、タカの背中をたたいた。ラライトとしては、これでおさまってくれ、という願いを込めてのものだったが…
今のタカにとっては逆効果だった。
「うっ、うるせぇ！これをやらないと、俺は、俺はぁあっ！！」
うあああああああ！！
ナイフをかざした格好のまま、タカはレンに向けて突っ込んできた。
ヤケクソといっていいくらいの気合の声は、裏返ってカッコはつかないが、それでも本人は構わず突進してくる。
ナイフは煌めき、風は裂かれ、タカは後悔しつつも全力で走りこむ。
だが、一人ぽつんとクロンの横に立つリリーナも、息をひそめるシーブも。果ては今まさに刺されようとしているレンも、誰も微動だにはしていない。
2人はレンを、1人は自分の実力を信頼しているが故の行動である。
「ったく、百年早いんだよっ！」

ドサッ。カランカラン。
トスッ。
鮮やかな回し蹴りを首に食らったタカは、蹴られた勢いをそのままにクロンと同じように地面に吹き飛び倒れ伏し、小さなナイフも手元を離れて舗装された地面に落ち、金属音を立てる。
刹那のあと、空中を舞ったレンが膝と足で軽く着地した。マントがばさりと浮かび、また体に巻きつく。

「おぉおおぉぉお！」

周囲からの驚嘆の声、そしてそのあとに浴びせられる喝采、喝采、喝采。
あわや流血沙汰、というところを見事に収めたレンに、みんな惜しみない拍手を送った。
リリーナも満面の笑みをたたえながらクロンをレンのところまで引きずって近寄る。今リリーナの目には、レンしか映っていないのだ。
「お疲れ様、レン。大丈夫？」
「はっは、それはこいつらに言ってやってくれ。…さて」
お前たちはどうする？と、レンは周りの空気に取り残され、仲間にも残された2人に無造作に問いかけた。
レンは笑いながら問いかけたが、ラライトもエィナも今の回し蹴りを目の当たりにしてから先ほどまでの逆ギレの威勢をまるっきり失っており、かつ「この笑いはきっと俺達を取って食うことにたいする笑いなんだ」と激しい勘違いを起こしていて、うなずくかうなずくまいか迷っているようだった。
レンとしてはこれ以上やりあうつもりもないけど、やるならやるぞ？というくらいのニュアンスだったのだが…。
迷いすぎて反抗することを選んじまうんじゃないかと心配になった

とき、

ピピーー！！

「レン、来たよ！」

「おっ、意外と早かったな」

「すまない、すまないな。悪いが、道を開けてくれるか！」

警備笛の甲高い、耳をつんざくようなうるっさい音が観衆の向こう側でしたと思ったら、やっぱりオレの予想通り、アイツの声も聞こえた。

でもこっちの空気もこれ以上持ちそうになかったし、結果的にはちょうどいいタイミングだったかな？

人込みをかき分け到着した警備隊の面々の中に、コアを見つけた。

意識のない男2人とラライト、エィナを拘束し聴取していく傍ら、部隊長であるコアが「終わり次第戻って投獄しておいてくれ」と兵士たちに投げかけた後、オレとリリーナの方に駆け寄ってきた。

もちろん、奴はハナからオレのことなど気にしてはいないだろうが。

「通報ありがとうございました、リリーナ殿。おかげで事態も早く収まりました」

「えぇ、コアさんも迅速な出動、見事でしたわ」

右ひじを直角に曲げる、この国の敬礼をキッチリ決めた後、オレにも一応軽く腰を折ってきた。けっ、安いモンだぜ。

補足だけど、リリーナの城での職種は、近衛兵隊長…。オレやコアより上、フウナと同じランクである。

なぜこんなにもコアが早く到着したのかというと、リリーナは常日頃から「警備石」という魔法アイテムを携帯していて、隊長職につ

いている人は必ず所持している。これは今のように犯罪が行われたとき、且つ自分が職務についていない時に、素早く城の警備兵たちに知らせることのできる便利なアイテムだ。
今週が当番だったコアはリリーナよりの伝達に駆けつけたのに、なんでそこにレンがいるんだ、という風な露骨に嫌そうな顔で再び話し出す。
「…あの、なぜこのような男とともに…？」
「あら、女のプライベートに首を突っ込むなんて、野暮よ？」
「あ、し、失礼しました！」
ちょっと女がらみでネチネチ言われればオレも懲りるだろうと思ったのか、リリーナにそれとなく「アイツに変なことされませんでした？」と聞いたコアに、リリーナはキツくお返しをしてやっている。リリーナもコアの実力は知っていて、普段は気さくに接する…が、レンのこととなると彼女はあからさまにレンを擁護しようとする気配がある。これはフウナにも共通して見られる特徴だ。
「リリーナ、注文いいか？」
「え？」
コアがアセアセして自分も聴取に慌てて加わりに行った隙を見計らい、レンはリリーナに耳打ちをした。最初は怪訝そうな顔をしたリリーナだったが、別に意図を聞くこともなく、ニッと笑って快諾してくれた。それもこれも信頼によるものだろう。
てて…。
「コアさん、ちょっとお願いがあるのですが…よろしいですか？」
「はい、はい？」
せっかく場をごまかせたと思ったのに、リリーナが聴取に首を突っ込んだことによってまたコアが委縮する。結果的に追い打ちをかけてしまったことになるが、さすがにここまで来るとレンも罪悪感が…やっぱり浮かばない。
腰の低くなったコアとリリーナが人の少ない場所に移動して話し込んでいる間に、レンは自分の周りにいる人にも絶対に聞こえないく

らい小さく、
『後で月の灯りに集合してくれ』
そうつぶやいた後、まばらになり始めた人込みに紛れ、自分も立ち去ろうとする。
「…あっ、レン！待たんか！」
「えぁ！？」
なんでオレが呼び止められなきゃならん？
不満が次々と湧き上がってくるが、ここは公共の場であって、いまコアは警備の全権を任されている長だ。歯向かうと後々政治にも影響が出るかもしれないから、控えた方がいい。
といったような目でリリーナが睨んで（本人は見つめて、くらいにしか思っていないだろうが）きたので、口から出かかった文句を飲み込むレン。
「あぃ、なんだ？」
「状況を知りたい。手短に話してくれ」
「俺だってお前となんか長々と話したくねーんだぞ」という不満がありありとつむげる言葉だが、こちらのコアも「てめーレンにばっかキツくあたってんじゃねぇぞ？あ？」の視線をめった刺しにしてくるリリーナに配慮し、普段よりは柔らかな物言いである。
「状況っつったって…リリーナさんが全部知ってるから、リリーナさんに聞いたらどうだ？オレに聞くよりお前も気分が弾むだろ」
「違いないな」
「なんだ、拗ねてんのか？」
「お前もアイツらと一緒に連れて行ってやろうか？」
すっかりおとなしくなったラライトとエィナは、しょぼくれながら6人の警備兵に連れられ、城の方へと歩いていくところだった。
「生憎だけど、そんな趣味はないんでな」
『じゃ、リリーナ、あとはよろしくな』
これでもすまなく思ってるんだぞ？と片方の眉をひそめたのだが、リリーナは了承しないらしく、一瞬だけ頬を膨らませ、またすぐに

元に戻す。
やっぱダメか、とレンは苦笑いし、
『…今度、2人だけでどっかに食いに行こうぜ』
リリーナの目がパッと大きく開き、コクコク頭を振ってうなずいた。
現金な奴だなぁ。
「コアさん、私がお話しします。彼は今日は非番の日ですし、私は常に城の中に身を置いているような身分のものです。決まり上でもやはりその方がいいかと」
「はっ…。それでは、彼らを発見したところから…」
気を取り直したコアは懐から紙とつけペンを取り出し、一方のレンはくるりと2人に背を向けた。

リリーナは、「遠くで悲鳴が聞こえた」というところからどうやって説明するんだろうな。
まぁ口を滑らせることもないだろうし、大丈夫か。

無責任にぷらぷら現場を離れたレンは、座敷月の灯りを目指して出発しがてら、6人の警備兵の間に挟まれた2人と、ガタイのいい男に担がれた2人が城の方に去る姿をじっと見つめていた。

個人の思想（前書き）

こんばんは、馬チョウ雲です。
この回は静かに進む回です。
前回の話と比べるとやや物足りない感じかもしれませんが、色々と話がつながってくるところでもあります。
深く読んでいただけるようにちょっとずつ工夫を重ねた回ですので、お楽しみいただければ幸いです。
では、始まり始まり～

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

個人の思想

月の灯りというのは、オレたちのねぐら（の上にある）ソウルシーフとは一線を画すシャレオツな店。
酒場なのにソウルシーフみたいなうるささもないし、どちらかと言えば静かすぎる雰囲気が人気だったりしている。
静かすぎて、ひそひそ声で話しているほかの人たちの会話も大して苦労なくすべて聞き取れるくらいに静かすぎる。
その痛いくらいの静かさを強調させるためか、狭い店内の照明は最小限にとどめられていて、中央あたりに天井から下がるろうそくくらいしかない。そのせいでさっきからオレ達のところに飲み物を運びに来る店員も何回か机にぶつかっている。まだ新人なんだろうな…。
それに加えて立ち飲みも禁止だし、座れる席もわずか２０席足らずで予約も利かない、と、まるでソウルシーフとは正反対の道を歩む酒場だ。
だけどその店の中の暗さからオレ達のような業種の人間には結構好まれる店で、静かに話し合いたいときにはまさにうってつけな場所なんだよな。
そこらの人間と違って、オレ達は夜目もきくから。

『レンさん、リリーナはまだですか？』
オレの前にはヒソヒソ声で話すシーブが牛乳を片手に控えている。
コイツときたら去年成人したくせに下戸だったりしていて、いつも酒盛りをするときは一人牛乳を飲んで酔っている。
冗談じゃなくコイツは酔う。
『ん？リリーナはママですか？いや、確かにアイツの生い立ちは色々あるらしいが…』

『なんでレンさん耳いいのにこんな至近距離で聞き間違えるんですか？』
あ、違った？
…とりあえず流しとけ流しとけ。
『まー、隊長ともなればいろいろあるんだろ。しかもコアにつかまってたからなぁ…。もちっとかかるかもしれないな』
『…でもレンさんも隊長ですよね』
話を流されたことに対しては特に触れないシーブ。
大人である。
『オレはな、ディルクに「オレはめんどくせーからただの兵士にしていれてくれや」っていったのにな、アイツが勝手に隊長職にいれやがったんだよ。めんどくせーこと山の如しだよ…。で、アイツなんて言い訳したと思う？『隊長も兵士ですよ』って言いやがるんだぜ』
もともと上から指示するのがあまり好みでないレンが故のいちゃもんに、シーブは苦笑いしながら頷いた。
『話戻すけどな、リリーナはさっき捕まえたあの悪ガキたちにちょいと色々聞いてもらってるから、先にお前の報告を聞きたいんだが……』
『あ、はい。わかりました！』
『声デカイ』
とても静かな店内で、地声の大きなシーブは煙たがられる。ここはうるさい客は追い出してもいい、というふざけたルールもあるので、細心の注意を払わなくてはいけないのだ。
カップルや久しぶりに自分たちの時間の取れたような中年夫婦たちも店の隅の方、つまりオレたちの方をチラチラ見てくる。
ちっ、やっぱオレもシーブも騒げる店の方が好きだな。
すみません、と咳払いをして、シーブは語りだした。
レンがクロンの腹にフックを入れたとき、周囲を注視していたシー

ブは、確かに見た。
自分と交差点をはさんで正反対の角に建つ3階建ての宿の一室から、金髪の男が顔を半分だけ覗かせ、交差点の喧騒を気もなさそうに見物し始めたのだ。
いや、騒ぎが起きて入れば誰だって振り向くものだし、それが大通りともなればその男と同じような行動を起こす人は数えきれないほどいるだろう。
しかし、シーブはその男の挙動が非常に引っかかったのだ。
総じて目やら耳やらのよいギルドの中でも、1キロメートル先にいる鳥の種類を言い当てることのできるほどの視力を持つシーブは、その男の部屋の様子もありありと目についていた。
そこは宿の寝室というよりかは、狩人が支度して出かけるための山小屋のなかのような感じだったとシーブは思った。
その寝室の窓の奥には、一般人が普通に生活するにはなんら必要のない弓矢や剣に、明らかに自分たちと同業者の人間しか持たないような道具がかかっていたのだ。
そして、机の上に重なる金貨や銀貨…。
その後もしばらくシーブは見える範囲の室内を観察していたが、他に人影や気配は見つからなかった。
金髪の男はなおもシーブには気づかずに、レン達、細かく言えばその中でもおびえ固まる男女たちの方を変わらず気無く、しかし寒気のするような目つきで睨んでいる。
明らかに、あの男は下の奴らと何かしらの関係がある、とシーブは確信した。
（「まずはこれをレンさんに報告だな」）

ザザザッ。

不意に、通りの方に動きがあった。
お？

なんかスゲェことが起きてそうだけど…って、アイツ！レンさんに向けて何やってやがる！！
ちょうど、タカがナイフを取り出した瞬間をシーブは目撃した。
観衆が見つめるレンとあの無礼な男。リリーナはレンを信頼しきっているのか、ナイフを取りだす前と後とで全然立ち位置が変わっていない。周りが動きすぎていて、一瞬リリーナがレンに近寄ったのかと思ったほどだ。
無礼な男というレッテルをはりつけられてしまったタカは、いまだナイフを、畏れ多くもあのレンに向けて震えていた。
…震えるんならなんでナイフなんか向けるんだよ。
まぁレンさんならケガも何もしないだろうし、大丈夫だろ…、あれ？フウナさん？

『フウナが？』
『はひ、一人でその不審な男がいは宿に入っていひまひたお』
出されたつまみをはみはみしながら、シーブは暗に「なんでフウナさんはあんなトコにいたんでしょうか」という質問をレンに出した。もちろん彼はレンをだまそうという魂胆があってこんな遠回しな言い方をしたのではなく、自分が受けた指令のことも踏まえ、フウナにも何か指示を出していたのかどうかを知りたかっただけである。
『…あぁ、知りたいのか？なんでフウナがそんなところにいたのかってコト』
『すいません…』
『いや、話さなきゃいけないことを話してなかったからのはオレだし、別に謝んなくってもいいさ』
シーブは軽く頭を下げ、レンは片手をあげた…ところで、カランカラン、と店の入口に吊ってあるベルが響き、お客の入店を告げ、スタスタと女の店員が入口の方へ歩いて行った。。
その数秒後、レンの横の席にリリーナが到着した。
夕方の時とは違い、城に入ったからか、外套の間から自前の可愛ら

しい城用制服に着替えていて、今は義賊ギルドの一員と言われても誰も首を縦にはふらないだろう。
パチ、パチ、と外套のボタンを外しながら、短く息を吐いた。
『ふぅっ、お待たせ。…もう、レンのせいでずいぶん遅れちゃったんだよ？』
『悪かった悪かったって』
たいして悪びれもせずにぬけぬけとこのセリフを吐くレン。
『オレさ、あのオッサン苦手なんだよ』
『コアさん？あたしは悪い人じゃないと思うけど？』
ここでのマナーを知っているリリーナは、静かに注文を取りに来た店員に静かにワインを頼んだ。
黒い外套を丁寧に畳んだ後、リリーナはそれを椅子の背に掛けて…なぜかオレの方に持たれてきた。
『ん？』
『疲れちゃったの。あの子たちは本っっ当に心が折れるわ』
もうイヤ、といいたげにため息までつく。これは悪いことしちまったなぁ。
今度美味いとこに連れてってやるから、と心の中で慰めた後、
『…で、リリーナの報告もあるだろうが、まずはオレの方からいいか？』
『うん、わかったわ』
『お願いします』
レンは、いっそう周りの人たちに気を配りながら、さらに小さく声のトーンを落とした。
『今回のオレ達の仕事は、盗まれたものの奪還だ。被害者兼依頼者はエクシンに住む男性。盗まれたモンはその人が大切にしていたネックレスと指輪。なんでも親の形見だとか』
『形見…』
形見、の2文字にシーブがピクリと反応する。
『あぁ。んで、それの報酬金として提示されてた額がだな…。五十

万ヴェンだ』
『ごっ？』
シーブは、ミルクをのどに詰まらせたような咳をした。リリーナも何と言っていいかわからない顔をしながら『五十万…』と小さく何度も唱えている。
『ご、五十万ですか…。でも、形見っていうくらいなら、それくらい大切な…』
『よく考えてみろ』
リリーナが腕を組んで考える横で、レンがシーブを遮る。
『オレ達が貴族のところに盗みに入って、盗ったモン売って配って残った金が高くて十万ヴェンだ。アイツらのところに命がけで入って得られる金が十万だぞ。明らかにそれ以下の難易度と見て取れるこの依頼が優に5倍の報酬だ…。怪しすぎる』
『…やっぱりそうだよね。あたしもそう思うもの』
さっきから真剣に考えていたリリーナも頷きつつレンに賛同した。
しかし、シーブはまだ納得がいっていないみたいだ。
『でも、でも…。やっぱり、自分の大切な親の物だったら、少なくとも、俺でしたらいくらかかっても取り戻したいと思います。その人も、早く取り戻してほしいから、金額を高く設定したんじゃないんですか？』
『ぬー…。シーブ、オレはその考えが悪いと言ってるんじゃないからな？』
前置きをしてから、血気盛んな若者を諭しにかかる。
『用心はしすぎるに越したことはないんだ。元々因果な商売の義賊を名乗ってるオレ達は報酬金なんか求めちゃいないだろ？それにいくら金額を乗せようが乗せまいが関係ないけど、ここまでとなると…』
『流石に安易に答えるわけにはいかない、のよね』
まっすぐな青年の見本ともいえるシーブは人を疑うことに慣れていない。ただうなだれて、すいません……とつぶやくのみである。

レンも、そういう熱血漢が嫌いではない…が、
この業界では、そういう性格だといずれ続けていくのがつらくなる時が来る。
それを嫌というほど知っているレンも、目を伏せがちにまた話し出した。
『…考えることもあるだろうが、それは置いといてだ。このまま依頼を受けるってわけにもいかなくなったから、今その男性の素性について調べてもらってるんだ』
『今…ですか？』
目をあげたシーブは、気を取り直しミルクを一気に飲み干してお代わりを頼んだ。
『今、だ。もしかするともう終わってるかもしれないけどなぁ』
『え？そんな事を誰かに頼んでるの？』
『今回は、な。不安だからさ…つか、知らなかったのか？』
…って、あ、そういえば詳しくコイツらにも言ってなかったっけな。知らないのも当たり前か。ハハハッ、いやぁまいったねー。
謝る言葉を一言も口にせず、先にも増してまったく悪びれないレンである。
首をかしげる2人はたがいに目を合わせ、ものも言わずに頷き、いつものことかと納得した。
普段から、レンの勘違いがどれだけ周りに被害を及ぼして、また団員たちがそれをどうやって解決しているかがいるかがよくわかる。
数分後にリリーナのワインが届いたところで、レンも同じものを店員に頼み、話をまた切り出した。
『…そうだそうだ。リリーナには言ってないけどシーブはもう知ってるはずだ。オレが個人的にそれを依頼した人が』
ニッと笑うレン。それに呼応してシーブは大きな声を出す。
『あ…！』

『声デカイ』

期待通りの期待外れ（前書き）

こんばんは、馬チョウ雲です。
今回も前回の流れそのままで、いわゆるスタンバイフェイズと言ったところですかね。
まぁこういった場面も自分の力を問われるところですので、手を抜くなんてことはしませんよ！
これからもがんばっていきますっ

…それで、ここに何かできないかなぁと考えていたんですが、気が向いたら公開できるだけの情報をキャラクターインフォとして書いていこうかな、と。
そう思いました。気が向いたら書いていくので、その時までお待ちを…
では、お楽しみください！

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

期待通りの期待外れ

レン直々の依頼をこなすことになったフウナは、ギルドへ依頼に出された手紙に書いてある住所を一人訪ね歩いている途中だった。
冷え性に長年悩まされているため、若干日が傾きだすころになると必ずマントをはおる彼女は、その姿格好からたびたびさすらいの女旅人と間違えられる。
今もこの数分の間にすら男に声をかけられたが、にべもなく無視していたところである。

「えっと…この辺で合ってると思うんだけど…」
レンたちが出ていった直後に自身も地下からはい出したフウナは、
「レンに期待されてる…。絶対成功させなきゃ！」
と表通りに出るまでは意気込んでいた。
が、今まで２０年ほど生きてきてあまり自分一人で出歩いた経験がないので、レンからの依頼だけどやっぱり怖いな…とも不安を感じている。
道行く人の流れを見ていると、なぜか手が震えてしまうほどだ。
自分が流されてしまうような錯覚に陥ってしまうらしい。
昔からほとんどの行動を共にしてきたレンが一緒にいないというのは、とても心細いのだろう。フウナ自身もレンはいなくてはならない存在として心の中に刻み込んでいたりするのだが、もちろんそれを本人に言いはしない。
どうせ本人に言ってもさらりと流してしまいそうだから。

そんなレンファンのフウナは、レンのまとめるギルド員にしては珍しく聴覚や嗅覚などが凡人並みで、クロン達を発端とした騒ぎに気付かないまま、その横を通り過ぎて行った。
なので、横切っている最中も立ち止っている今も見える、交差点の

人だかりができるほどの騒ぎもその渦中にいるレン達には気づかず、「馬車が横転でもしたのかなぁ」くらいにしか思っていなかったりする。
いや、馬車が横転しても随分大変なのだが。
ともかく、今はその人だかりをメインストリートをはさんで向こう側に見るフウナは、エクシンでもかなり大きい宿の一つに数えられる「アトラス」という名の宿屋の前で足を止め、ぐいっと顎を上へ持ち上げた。
宿にしては、ずいぶん豪奢な構えだなと言うのが昔はじめてこれを見たときのフウナの感想だ。
３階建て、しかもこれだけ大きな建物となると木だけの場合は強度が心配になってくるころだが、一般の建物には珍しい重厚な石造りの土台があり、見ただけでこの宿がかなりの収入があることがわかる。
こういう家、建物というのは大抵頭の固い古い考えを持つ貴族たちの支配下に置かれていたりするのだが…。
そんなことは気にせずにフウナは視線を戻し、マントをさばいて大きな木の扉を力を込めて開けた。

（「わぁ…。初めて入ったけど、すごいなぁ……」）
見た目とそう違わずに、内装も立派だ。
絨毯こそひかれていないが、掃除の行き届いたこの宿のホールは城のそれにどこか雰囲気が似ているほど美しく、木の壁が光っているかのように中が明るい。このホールからだけでも、清掃人と宿の主人の日々の苦労がにじみ出てきているようだ。
もうちょっと広ければ、日々ダンスが行われてそうなくらいに見事なホールである。
荘厳、といってもおかしくないくらいに静かで重みのある空気が、

フウナにとってはなんとも心地いい。城にいる時とはまた違うこの荘厳な空気にしばしフウナは酔いしれた。

入口から数歩中に進むと、左手に宿のカウンター、右手に喫茶店が見えた。

茶店と言っても小さな机と柔らかそうなソファーが置かれた休憩所のようなものだが、目につく客はどれも年老いた好々爺やその妻、もしくは子供にまでキチンと礼装をさせて自分の横に立たせている実直そうな若い夫婦で、フウナのように一見冒険家のようなナリの客は一人もいない。見てくれを重視して生活する者たちの巣窟のようにも見える。

もちろんこの宿が好んでそういった客たちをえり好みしてとっている訳ではなく、ただこの宿の基本料金はバカ高く、冒険家たちはそのほとんどが金欠であるだけだ。

「お前のような奴が、ここに何の用だ」とホールでコーヒー片手にくつろいでいた客たちからはジロジロと睨まれたが、それらをガン無視してフウナが歩み寄ったホールマスターはそのような態度は一切出さずに、カウンターの向こう側でうやうやしく一礼した。

ほれぼれするくらいに洗練されたお辞儀だ。

…今度みんなに覚えさせようかな。

「いらっしゃいませ。ご予約の方でしょうか？」

「いえ、違います…」

「ではお名前とご希望のお部屋をお伺いいたします。本日は3階の1等室はすべて貸し切りとなっておりますので、2階以下のお部屋でご案内ができます」

ここの宿の3階は、毎日どこぞのお偉いさんがたが貸切にしていて、少し金のある一般人はもとより、貴族ですらも予約を取ることができないという噂が立っていて、一部の界隈では有名だ。

フウナも風の便りで聞いたことがあり、この宿はずいぶん人気なんだな、と素直に感心している。

「あ、いえ。宿泊ではないんですが、少々用事がありまして…」
「郵便でございましょうか？でしたら私がお部屋までお届けしますが…。それとも」
ひげまで白くなった、還暦を迎えていそうなホールマスターは、本当に懇切丁寧だ。しかし、その心意気を今は受け取る時ではない。
フウナは少し心を痛めながら、そのマスターの話を遮った。
「…あの、すみませんっ。…私は、こちらの宿の人間について伺いたいんです。できれば場所を変えて」
「は、はぁ…。左様でございますか。答えることのできる範囲であれば、お答えいたしますが…。…では、こちらの奥へどうぞ」
困ったような顔で、自身の後ろにあった管理室へ案内するマスター。いきなり入ってきた流れ者のような格好の女が毎日1等室を貸切にされるような宿に泊まる人間たちとどんな関係があるのだろう、とでも思っているのだろうか。
管理室とカウンターとを仕切るのれんを分けるとき、少なくとも、フウナはこの時はそう見当をつけていた。

『つまり、フウナさんは依頼主の素性を調べるためにアトラスに入っていった、ってことですか？』
『よくわかってんじゃねぇか』
届いたばかりのワインを一息で飲み干したレンは、「もう一杯」と今しがたワインを運んできたばかりの店員にグラスをわたした。受け取った店員は何も言わなかったが、あまりもの飲む速さに度肝を抜かれていたことは確かだろう。
このグラス、結構内容量あるんだぞ？と言った驚愕の目でレンを一瞬だけ見た後、そそくさと厨房の方に下がる。
『確かにあれくらいの宿なら、宿代がわりの相当貴重な品の1つや2つはありそうだものね。形見、って言うのもなんだか嘘くさく思えてきたし』

横でリリーナが吐く核心を突くような鋭いセリフは、レンも迷わずに頷くほどのモノだ。
『…依頼主の住所見て、アトラスってことだったから色々と考えることもできた。泊まってる奴のモノだから早く取り返してほしい、とか、今リリーナが言ったようなものとか、な』
シーブが興奮しているのか、小さく首をコクコクコクコクコクコクコクコク…。
レンの推理に聞き入っているようだ。
『だけどオレの持ってる情報だけじゃ、ここまでしか考えられないし、それ以上考える脳もないからここで打ち切りだけど…リリーナ、お前の報告が必要だ』
『…！うん、まかせて』
疲れて死にそう、に似たセリフをのたまわっていたリリーナが、急にシャキッと背筋を伸ばしてポケットから小さくたたんだ紙を取り出す。
たたまれた時のしわを伸ばしつつ、
『レンがあいつらをのしていったあとに、コアさんと一緒に城まで連れて行ったの…』

「ここに入れ」
コアと部下は情け容赦なく４人を同じ地下牢に叩き込み（内２人はまだ気絶）、とても重そうな錠を二重に掛けたあと、１階の牢入口で報告を待つリリーナのところへ駆け足で戻った。

カッカッカッカッ。

狭い階段通路に、コア達の足音が反響する。
この音の跳ね返りやすい階段のおかげで、１階にいても地下で話をしている囚人がいるかどうか等がすぐにわかるのだ。
なかなか計算されたつくりである。

入口で壁にもたれて待っていたリリーナの前に、素早くコア以下２人が整列する。
「リリーナ殿！ラライト、エィナ、残りクロンとタカと言われる者４名、しっかりと閉じこめておきました」
「ありがとう、コアさん」

ビシッ。

片方は優雅に、片方は言わば機能的に右肘を９０度曲げ、敬礼をとった。
ひじを曲げて唇を引き結び、部下２人を後ろに控えさせるコアは、レンと比べ物にならないくらいに隊長姿が様になっている。
ここは悔しいが、リリーナも素直に認めるしかない。
でも、レンの方がいい男だけどね！
「…それでは、後は手筈通りにしてください。お願いしますね、コアさん、グフタスさん、ニーアさん」
「…は、はい！！（３人）」
コアよりも、名前を覚えてもらっていた部下の２人の方が声を高く張り上げ、元気よくその場から立ち去って行った。
そして、その３人の後ろ姿が角を曲がって見えなくなったと同時に、リリーナは地下牢への階段を下り始める。

コツ、コツ、コツ…。

コアとは違うゆったりとした足音が、例外なく壁に跳ね返り、大きな音となって地下牢中に響く。これは本当に計算されたつくりで、囚人を拷問するときに絶対に寝かせないように音が大きくなるように設計されているともいう。
なので、リリーナが４人の入る牢の前についたときには、起きてい

る2人はうんざりした顔でこちらを見上げていた。
今はまだ向こうはこっちの顔は見えないだろうが、こっちは向こうを見放題なので、暗闇で目を凝らして不細工になった女の顔がくっきりはっきりと見える。
「どう、気分は？」
「良いわけないじゃん」
エィナは見た目からもわかるようにいつまでも反抗期真っ盛りなので、素直に受け答えをしてくれるとはリリーナもハナから思ってはいない。
同族嫌悪と言ってしまっては簡単だが、リリーナある種の嫌悪感を持っていたりした。
なので、ターゲットをもう一人の起きている人間、メガネのラライトと名乗る青年に変えることにした。まったく不憫な男性である。
「ねぇ、あなた達って、ひったくりとかするのは今回のが初めて？」
エィナに声をかけた時とはまるで違う、優しく慈愛に満ちた…と自分では思っている声。
我ながら、うまく言えたと思う。
「…いや、結構やってるよ」
「ちょっと、ラライト！」
「うるさいな！僕はみんなのことを思って言ってるんだ！」
リリーナの思惑通り、こっちのメガネはまだ御しやすい。
しかし…大きな声を出されるのは、非常によろしくない。
ここで大きな声を出されると、自分自身はもちろん牢の外の人間の鼓膜も刺激されるからだ。
「わ、わかったから、ちょっと落ち着いてね…？」
「あぁ、すみません……」
「…勝手にしちまえ！」
ついに仲間割れまでしてしまう。
比較してしまっては悪いが、城の中でのレンとコア以上に仲が悪いと思う。

浅いため息を隠すと、次にはラライトが答えやすく、なおかつエィナが過敏に反応しすぎないよう、尋問長でもあるリリーナは慎重に言葉を選んだ。
「…それなら、次の質問。あなた達は誰かの命令でそういうことをしてたのかしら。そうだったら早めに教えてね？」
…別に尋問長と言っても、そんなに話術に長けているわけではない。元々尋問なんてものは、相手が吐かなければ痛めつけて吐かせるだけの単純作業だから。
とレンが言うのがわかる気がする。
「それを言ったら、僕たちはどうなるんですか？」
やはり丸々そのまましゃべってくれはしないようである。仲間を売っていいのか自分たちを犠牲にすべきなのか、それを迷っているがための時間稼ぎの一手だ。
しかしそれを素直に「しゃべったら釈放してくれるのか」と言えないのはまだ青い証拠。
その意図を見抜けないリリーナではない。
「別にどうとも。あなた達が盗みを働いたのは事実なんだし、捕まったのも事実。ならそれ相応の罰を受けるのも事実よね？」
「……」
改めて、自分たちの犯した罪について考えているのか、ラライトはうつむき、エィナも心無し気まずそうにリリーナの目に映る。
この時になってもだらしない男2人はのびたままである。
「…で、質問の答えは？」
拒否するようなら、尋問もあるわよ、とも小さく、だがしっかりと相手の目を見て、付け加えておいた。
リリーナとしては犯罪をした奴に子供も大人もないので尋問することに何の抵抗もないが、こういっておいた方が時間がかからずに自白してくれることが多く、鞭を振るわないならそれに越したこともない。
リリーナなりのこの考えは、城では賛否両論あるが、レンをはじめ

とした彼らサイドの援護によって何もとがめられずにいたりする。
「…僕たちは」
「ん？」
「…僕たちは、盗賊団に入っています」
これはあらかじめ考えがついていたことだったので、そんなに驚きはしなかった。
「…それで？」
と急かそうかと思ったが、それからラライトは、ゆっくりと、だが確実に、自分たちのことを話し出した。
エィナもそれを中断させるような真似はせず、終始、よく言えばのんびりした空気で話は進んでいった。
「まず団の名前は、エクシンの大盗賊団、です」
（「うわっ、ベタだなぁ」）
レンのネーミングセンスが並み以上で本当によかったと、リリーナは安堵のため息をついた。
「構成人数は？」
スムーズに話を進めるため、リリーナも合いの手を打ってやる。
「僕たちを入れて１０人です」
「リーダーの名前は？」
「…」
やはり後ろめたいのか、ラライトは口を閉ざす。
「言わないならほかの人に聞くけど、後でどうなるかは知らないよ」
そういってリリーナはラライトを切り捨て、床に転がるタカを起こすよう指示した。

『…あれ？それだけ？ずいぶんあっさりだな』
『だって…後は聞かせられるようなことしてないから』
さらっと恐ろしいことを言ったリリーナは、グラスを傾け、赤ワインをくゆらせた。

レンもいつもそういう景色を見てきているので、特段に問い詰めたりはしない。
『で、わかったことから言』
もっちゃもっちゃもっちゃもっちゃもっちゃ…
チーズを一気に5個ほど口の中に放り込み、もちゃもちゃさせたシーブは、レンから小突かれてむせ返る。そして周りから痛い視線。この程度の音でも周りに聞こえるから、相当な辛抱が必要なんだよな。
『…いい？』
『あ、悪い、どうぞ？』
『ゲッホゲッホッホ』
『…』
リリーナは若干肩を落とした。
『そのあとタカって奴を起こしてたくさん聞きだしたの。どうやって聞いたか…は今は言う必要はないよね。わかったことは、リーダーの名前はベラルド・ライン。長めの金髪で、目つきがキツいらしいって。…関係ないかな。それと、レンに言われた通り、あいつらが最近盗み出したものの中に今回の奪還目的のものがあるかどうか、確かめるために聞いてみたんだけど…』
レンが待ってました、とばかりにニヤッと笑い、頷いてリリーナに続きを促した。
コア達が到着したときにリリーナを呼び寄せ、耳打ちした内容は、
「これは勘だけど、多分あいつらは最近頻発してる盗難事件に何かしらの関係があると思うんだ。だから、城にいったら奴らから聞けるだけ依頼の内容関係の話を聞き出しといてくれないか。…これがその紙だ」

というものであった。
レンとしても「情報はあればあった方がいい」程度の気持ちでリリーナに頼んだものであったのだが…。
『ちょうどそのときタカが身に着けていた指輪とネックレスがその盗品に酷似してて、取り上げてよぉっく見てみたら、細部にいたるまで記載されてた情報と一致してたから、ここに持って来ちゃった。…ホラ、コレだよ』
『マジでか！』
『レンさん声デカイです』
昼間は無かった、リリーナが首から下げていた高そうなネックレスと、そのネックレスと一緒に回してあった指輪は、なんとレンが捜していた盗品、奪還目標だったのだ。
それを確認した後は無論、オレ達は店を追い出された。

仕方なくオレ達は黒の閃光本部に舞い戻る羽目になる。
どちらにせよいったん作戦を一から立てる必要もあったので、丁度よかったんだけど…。
最初からいたオレとシーブはともかく、ロクに飲んでもいないのにワイン代だけ払わされたリリーナははたから見てもとても不満げな表情を浮かべているのがすぐにわかった。
おかげでというかそのせいでというか、今度のリリーナとのメシの約束が2回に増えることになったんだ。
そのリリーナは、極細裏通りを歩き、隠し戸を開けてさらに地面に蓋をしてある鉄板をどけて地下につながるはしごを下りている途中でもぶうたれている。
「もう、あそこのワインはおいしいんだよ？それを一口しか飲めないなんて…」
「悪かったって…でもよ、あそこで追い出されたのはそれまでにシーブが積み重ねてきた注意がたたって、オレの時に怒りが爆発しちまっただけだろ？すべての責任はシー」

「レンさん、ひどいっすね」
「バカ言え、これくらいじゃないと世の中はわたっていけねぇんだよ」
カッカッカッカッ…とリリーナを一番下にして、調子よく鉄製の長いはしごを下りる。
本当に真っ暗なために、オレ達みたいな業種の人間でないととても調子よくなんて下れない代物だ。
何十秒か下り続けると、まったく風の通りのない、むわっとした空気のよどむ空間に足がついた。この空気はどこからか本部からじわじわと流れくるものである。
そして底に着いてすぐに、オレより先に下で待っていたリリーナが、まだぶつぶつ言いながらも地下倉庫という名のオレ達のアジトに通じる立てつけの悪い扉を力強くガチャっと開けた。

「…あ、おかえりレン！それにリリーナちゃんとシーブもお疲れ様」
元気のよい、それでいて聞き心地のいい高い声の持ち主、フウナが疲れた顔をしながらもレンたちを出迎えてくれた。
下の隙間から光の漏れていたドアの向こうは、いつもレンたちがたむろする酒場地下につながっていたのだ。
部屋に入ってすぐに気付いたが、けしからんことに、フウナ以外の人間はほとんどが帰宅していたようで、本部には椅子に座ってオレ達の帰りを待っていたフウナと、ガラの悪そうな豪快な見た目が正確にそのまま反映されていそうな大男がその向かいに座って話し込んでいただけだった。
その大男も、オレを見るなり椅子から転げ落ちそうなくらいに驚き、また喜んだ。
「こいつぁマスター！こっちで会うのは久しぶりですなぁ！！」
「おぅエル！城勤めお疲れさん」

裏切りの事実（前書き）

お久しぶりです、馬チョウ雲です
いや～ひっさびさの更新になりました！
夏休みもあけ、新体制になったためにしばらく更新をやめさせていただいておりました。連絡の不備を謝罪いたします
が、ここまでお付き合いくださいまして、あらためましてありがとうございます！
これからもより一層邁進していく次第ですので、よろしくお願いします。

さて、これからこの前書きに何かしていきたいと思って何かないかなぁと考えていたのですが、キャラクターのプロフィールでも乗せることにしました！
もちろんお気に召さなければ飛ばしていただいて結構ですし、公開可能なものしかお見せしませんが、もっと楽しく小説を読んでいただけたら幸いです。

ブログ
ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／

裏切りの事実

そこらへんで飲んだくれてそうないかついオジサマは、れっきとしたレンの知人だった。
「ついさっき仕事が終わりましてねぇ。…あ、こいつでも飲んでくださ」
「ルカ！レンには飲ませちゃダメ！まだやることあるんだから」
昼の経験をもとに、自分の用事があるときはレンに酒を飲ませてはいけないと痛感していたフウナは、ルカの手に握られていた2本の酒瓶を素早く取り上げた。
この男と比べると、酒瓶が哺乳瓶にまで小さく見えてしまうほどの巨漢から、臆すことなく酒を取り上げることができる女性はフウナくらいしかいないだろうとレンは悲しみにくれる。
悲しみにはくれないものの、ちょっとだけの同情心はルカにも浮かび、
「姐さん、ちっとくらいいいじゃないっすか。マスターも仕事終わりに一杯くらいは飲みたいと思いますよ？」
「仕事が終わってないから言ってるのよ、ルカ。今月酒のおつまみ無しにするわよ」
「マスター、ちょっとは辛抱してくだせぇ。俺のためにも」
「お前、つまみ程度で寝返るのか？」
ちょっとだけの同情心は過剰ともいえる利己心によって跡形もなく吹き飛んだ。
情けなく笑うレンは、豪快に酒の入ったグラスを空にしたルカをよそに、壁にマントをかけてきたシーブとリリーナを自分の隣に座らせ、一杯だけ酒を注いでくれたフウナにも手振りで席に着かせた。
フウナの調査の報告を受けるために。

「はじめよう」
ときたま見せるレンのマジ顔が、周囲の空気を変えた。
「さって、エルは知らないだろうが、ちょっと我慢して聞いててくれよ。フウナ、報告してくれ」
「うん」
自分も酒を飲んでいたのか、よく見ると頬のあたりがぽっと赤くなっているフウナ。
実をいうと、フウナは酒を飲んではいないが……。
事情を知らない途中参加のルカも、酒を注ぐことをやめて静かに話を聞き出した。
「あの宿のご主人にお話を聞いてきたわ。依頼元は確かにあそこの住所だったから、私は始めはあそこの家族の誰かが依頼人だと思ってたの」
「いいぞ、続けて」
シーブもリリーナも、自分たちの持っている情報と照らし合わせつつ、真剣なまなざしをもって話に聞き入る。
「でもご主人に聞いたところ、彼の家族は養子の息子一人だけで、妻はいないし、そんな依頼を頼んだ覚えもないとのこと。…つまり、ここで形見って言う言葉と依頼自体の信頼性はほぼ無くなるわ」
「…」
最後まで相手を信じたかったシーブは、愕然とした様子でうつむく。
「だから、その事もあって私はご主人を問い詰めてみたの。隠していることはありませんか、って。…大丈夫、シーブ？」
フウナもそんなシーブを気遣って、背中をさすってあげた。フウナは聞こえないだろうが、涙のにじむ音がレンやリリーナには聞こえた。
フウナの優しさは、男泣かせである。
「うん、それで？」
「身分を明かさない人に教えるわけにはいきませんって言われたから、言っちゃった」

「…なんて？」
不吉な予感がしたが、それを押し殺してレンは恐る恐るフウナの顔色をうかがいながら問うた。
「エクシン城将軍、フウナ・レストです、って言ったら、お茶を豪華にしてくれたよ」
「…ふぅ、それならまぁいいだろ。ちゃんと口止めしたよな？」
「もっちろん！お金少し握らせて、でしょ？」
レンはフウナが、「お前は誰だ」「義賊団の人間です」と言ってご主人の目を回させたんじゃないかと危惧していたのだ。相当な天然のフウナがやりかねないことなど拾って集めたら山のように積みあがるだろう。
「ほっほぉ、姐さんもやりますなぁ。一歩間違えれば俺らの関係がバレちまうってのに」
同じようにルカも安心したようで、止めていた酒盛りを再び開始した。
オレ達よりずいぶん年上のエルは、何故か常にオレのことをマスター、フウナのことを姐さんって呼んでくる。
明らかに人に好かれそうなタイプではないオレがこんな風に呼ばれるのは、なんだかこそばゆいんだ。だから常日頃からやめてくれ、って言ってるんだけど…。
「俺の好きで呼んでるんです。気にしないでくだせぇ」
と、ガハハハと笑いながらオレのグラスにも豪快に酒を注いでくる。いつからこんな反抗期真っ盛りになった？オレはそんな子に育てた覚えはない！
「でも仕方ないでしょ？そうでもしないと話してくれそうになかったし、ちゃんと尾行されてないかどうかも確かめながら入ってきたし」
「大丈夫大丈夫！オレはお前信じてっからよ。ほら、続き言ってくれ」
「あ。う、うん…」

ルカがこっそり「妬けますなぁ」と言ったのをもちろんレンは聞き逃さなかった。

今度マジでつまみをださないでやる。

おとなしくなったフウナはまた朗々と語りだした。
途中でリリーナに背中さすりを交代していたので、リリーナはまだうつむくシーブを奥につれ、布団を敷いてやっている（布団とは名ばかりで、ただのワラの上に布を敷いただけの簡易的なものだ）。
ああ見えて、リリーナもとても気遣いのできる女性だ。シーブも抵抗することなく布団に身を投げた。
まだ１８歳の彼には、この道は厳しいかな、と、伏せたシーブに目をやりレンは思う。
自分も幼いころからこの家業をやってきたが、それはやむを得ず、と言った心からが大きかった。そうしなければ生きてこれなかったから。
シーブやリリーナを代表にする、「この仕事をしたい」という正直な生き様は、この年頃の人間にしては当然、と言ったところなんだろう。
レンはそんな自分にまっすぐな人に触れ、見、思い、いつもうらやましいと思っている。
そして、そういう奴に会うたび、この仕事も悪くないな…と、レンの顔は自然と緩む。
「レン、聞いてる？」
「…あぁ、よろしく」
シーブに布団をかけるリリーナから目を離して、机につく三十路と女性に向き直った。
「オホン。…ご主人は驚いていたわ。そして、『このことは、秘密裏にお願いします』って懇願してきたの。何があったのか、って聞いたんだけど、なんか興奮してるみたいで、要領を得なかったわ」

「ま、よほどの何かがあるんだろうな」
ルカもレンに賛同し、「姐さん、他には」と柄にもなく急かした。
どうもこっちも興奮してきたみたいである。
「要約するけど、どうもあそこの宿は数年前から3階の一等室が貸し切られているって噂があったじゃない？」
「あぁ」
「俺も聞いたことがあります」
アトラスの豪華さは市井はおろか城内でも噂だつほどのものなので、知らない人間の方が少ない。
「あれは全部流布だってことだったの。実際にはある団体がご主人を脅して3階をもらい、その一等室を貸切にしている奴らからの命令でそういう事を言わされていたらしいわ。脅された内容は…おそらく人質でしょうね」
「ほう……」
「なかなか、大胆な事をする奴らもいたもんですな」
顎をポリポリ（ボリボリ？）ひっかくルカの眉が中央に寄る。
「しっかし…、なんでその主人は城まで申し出なかったんでしょうなぁ？姐さんの言うには、息子さんが1人居るだけだとか」
「その息子さんは、トゥーシンに住んでるの。あのご主人も元々はトゥーシンにいたみたいで、こっちに移り住んでいるんだって。距離が離れているから、自分が行動を起こす前に息子さんに連絡が取れないんでしょうね。おそらく、手紙の一つ一つまで監視されてると思うわ。血がつながって無くても、やっぱり1人息子だし……」
「ひっでぇ話だなぁ」
オレはそう言うしかできない。話したくても話せず、誰に見られているともわからない中で日々接客してきて、そのお客を一人として信じることのできない日常を送らされてこられたんだ。
「だから、これは私の意見なんだけど…。あの依頼は、アトラスを支配してる奴らのものと見ていい。そして」
「依頼はおそらくわざと作られたもので、レンの睨んだ通り、私た

ちのこなした奪還任務と関わりあった、ですよね？」
いつの間にかリリーナがオレの隣に座っていて、フウナに向けてニッコリと笑った。
酒のにおいの充満する地下室で眠れるシーブもシーブだが、そこまで持っていかせたコイツもコイツですごいな、まさかこんなに早くこっちに戻ってこれるとは。
「そういう事…なんだけど、よくシーブがあんなところで寝れたな」
「お城から魔法睡眠薬持ってきてたから、使ってあげた。起きるころにはしゃっきりしてると思うわよ」
「げっ、お前アレ持って来ちまったのか？結構値段たっかいんだぞ」
「でも買うのはあたしじゃないもーん」
ニカッと八重歯を見せてくるが、レンはあまり笑えない。
魔法薬と呼ばれるものは、かつて人々がまだ豊富に魔力を扱うことのできた時代の遺物が大部分で、現代では製造できるのはごく一部の魔道士に限られる。
あの魔法薬を持ってきたのにオレが関係していたのがばれれば、補償するのはオレになってるんだ。なぜだか知んないけど！
今度ディルクに言っといてやろう…。
「うん、リリーナちゃんの言うとおり、レンたちがやってくれた任務と関連があると私は思ったの。というか、もうそうとしか考えられないもんね。…それで、関わりがあった、っていうのは、つまり…？」
「証拠があるってことだ。ほら、リリーナが持ってる」
「え？」
リリーナが得意げな顔で胸元から引き揚げた小さな首飾りと、それに通されている指輪を見ると、フウナは今の3倍の声で「え？」と驚いた。ルカも急展開についてこれずにずっと難しい顔をして考え込んだままである。
「偶然オレ達が夕方にとっ捕まえたコソ泥どもが持ってやがったんだ。しかもそいつらが、エクシンの大盗賊団と名乗る奴らと来た」

エクシンの、のくだりを言うとき、やはりレンも頬を膨らませて笑いをこらえた。
「ひでぇセンスだが、それはおいとこう。問題は、そのアトラスの3階に陣取る奴らがオレ達に何の用があるのかってコトだよな。」
「そ、そうだね…。もう、奪還してたんならそう言ってよ。こんなに長く説明しちゃってバカみたい…」
仕事の速さに気後れするフウナとルカはしきりにあたりを見回したり髪をいじったりして、まったく落ち着きのない様子。
オレ達の実力は見てきたはずだろ？
そんな2人を見かねて、リリーナが自分なりに考えをまとめ始める。
「つまり、エクシンの（ここでクスッと笑う）大盗賊団に敵対するギルドの依頼ってところかな。相当な値打ちのしそうなこの指輪とかを盗まれたけど、そこはとても実力のあるギルドで、自分たちでは太刀打ちできそうにないから……？」
「そうだな、そうすれば、宿のフロアを支配していたのもほかのギルドと考えれば納得がいく。本来ならそのギルドは潰さなくっちゃいけない立場だけど、今のオレ達の任務を遂行してから城に報告するとしよう」
エクシンでは盗賊団の徹底排除が掲げられ、城の兵士は治安を守り国境を守ると同時に賊のあぶり出しに日々全力を注いでいる。
先王が統治していた時代は治安などあったものでもなく、数百を超える盗賊団がエクシンをはじめ周りの王都周りの市外にも広がっていたものだ。現在では減る一方ではあるものの、やはり依然として数は多い。
黒の閃光も義賊を名乗るだけあり、城とは別に盗賊団を殲滅することにも力を入れている。
レン達も狩られる側にいるのだが、今のところは完璧に逃げおおせている。もし、「王城と賊の間に親しい関係がある」などとばれたら、いったいどうなるのか…。
というような重いことは考えずに、彼らは今日も自分たちの役目を

忠実に果たす。
「…うーん、難しくなってきたね。私はルカと交代しなきゃだし、そういうことは苦手だし、そろそろ行くわ」
ガタッと席を立ち、フウナはさっきオレ達が入ってきた扉へと向かう。
重役は大変だなぁ…。ただの隊長でよかったわ。
お疲れさん、とフウナの肩をたたきながら、
「そうだったな、オレは今日はこっちに泊まってくから、連絡しといてくれ」
「うん、わかった。ルカ、レンには飲ませちゃだめだからね？」
「はは、手厳しいですな」
「リリーナちゃんも、早く寝た方がいいよ？」
「はい、ありがとうございます」
まるでお母さんのような立ち回りを見せたフウナは、名残惜しそうにレンを見つめた後、静かにドアを閉めた。
にわかに静かになった地下室で、シーブの寝息だけが絶えずに聞こえる。
沈黙を破り、まずルカが低い声を部屋中に響かせた。
「マスター、込み入ったことは分かりませんが、俺の考えじゃまずディルクに相談した方がいいと思いますぜ」
酒にめっぽう強いルカが、（レンの確認できた限りでも）５杯目をなみなみとグラスに注ぐと、リリーナがそれをさっと奪い、素早く半分ほどを胃の中へと流し込んだ。見た目の割にはとんでもない技である。まだ月の灯りでのワインが飲めなかったことを根に持っているのだろうか。
「…ぷふぅ。あたしもそれがいいと思うな」
「それが通例だろ。明日アイツの所に行ってくるよ」
レンはリリーナの飲んだグラスに残った酒を奪った上に飲み干し、ルカへ戻した。

「さすがマスター！俺が姐さんにチクっても知りませんからね」と顔を可能な限りにしわくちゃにしながら笑うルカは、グラスではなくビンから直接酒を煽った。
「レン、これまでのことをちょっとまとめてくれない？途中参加だと、やっぱりよくわからないの」
リリーナがオレの膝に手をのせ、ぐいっと顔を近づけて目を覗き込んできた。
ちなみにこの時に熱っぽい目線になっていることにレンは気づいていない。
「ふぅ、オレは文才がないから、ちょっとまとまりがないかもしれないけど許せよ？」
とリリーナを見つめ返したが…。
言われたことに答えただけなのに、何故か不満そうに唇をとがらせてしまった。どうも期待にそえなかったみたいだけど、オレ何かしたのか？
ルカは相変わらずにやにやこっちを見てくるし、いったい何があんだよ！
あー、くそっ。話してりゃ期限も直してくれるだろ。
リリーナから目を外し、天井の隅を見ながら思いつくようにポツポツと話し出した。
「初めに、オレ達は依頼をこなしてたよな？奪還任務。で、それで取り返してほしいって言われてたのが形見の指輪とネックレスだ。依頼主の住所はアトラス。最初はそこの主人が依頼主だと思ってたが、フウナの調査でその人に本物の家族はいないってことがわかって、依頼自体が偽装されたものだとわかった。加えて、フウナの調査とシーブの報告から、そこの宿の3階を支配しているギルドだか団体だかがその依頼を作成したものだとオレ達は見当をつけてる…寝るなよ」
「あ、ゴメン。疲れちゃって…」
んんんっっ…と腕を伸ばして伸びをしたリリーナは、体をオレに預

け、今にも瞼がとじそうである。
とはいってもエルの方が今は熱心に聴いているから、オレも話をやめるワケにはいかないんだけどな。
しっかし、酒は少し飲めば頭が冴えてくるって昔聞いたが、それは間違いじゃないみたいだな。
あれほど胡乱だった意識が、今は透き通るほどに冴えきっているんだ。
酒のおかげで滑らかになった舌と意識とを活用し、さらに語りを続ける。
「そいで、オレ達が任務を遂行しようとした先に起きたあのひったくり。とっ捕まえてたら、大方予想通りの最近ここらで頻発してるガキどもによる犯罪の類だった。そいつらを城に連れてってリリーナが聞いたことには、ガキどもはエクシンの（ここで目を押さえてクックックと声を出さずに笑う）大盗賊団って賊に入っている。今までも何回も犯罪をしていて、構成人数は１０人だったっけな。それ以上は聞けなかったらしいが、そのうちの１人がオレ達の探していた盗品を２つとも持っていた、と…。えー、あ、そうだ。さっきも言ったが、オレはこの盗賊団が盗んだものがアトラスの宿を貸し切っている賊…まぁ言いにくいし『バカ』とでもしとくか。その『バカ』が少し脚色した依頼をオレ達のギルドへ持ってきた、っつーことだ。関係がないなんてほとんど言い切れないし、依頼をこなした後にその関係をキッチリ洗い出して、そのあと城に報告して壊滅させる予定だ。どうだ、長い話で飽き飽きしてるだろ」
「俺も文才がないのは同じなんで、どうとも言えねぇですよ」
「だな」
完全に眠ってしまったリリーナの頭を膝に乗せてやり、手でなでてやると、心なし彼女の表情が緩んだ気がした。寝てるはずなのにな。
さて、明日は大変だぞ。

真実の隠れ家（前書き）

こんばんは、馬チョウ雲です！
一向に更新のペースが上がらないのは気のせいと思っていただいて構いません（汗）
それでは記念すべき一発目のキャラ紹介！レンから…と言いたいところですが、裏をかいてまずは団員から行きまっっしょう！

リリーナ・クライス
２０歳の女性。
青い髪をゆるくまとめ、青目。
３年目の新参者。色町で働いていた過去を持つが、本人もギルド員もそんなに気にしていない。レンの大ファンで、朝起きた時にレンの横にリリーナがいることもしばしばある。
城では近衛兵隊長として任に就く。レンより２つ上の階級なので当然レンは敬語を使わなくてはいけないのだが、実質ほとんど使っていないといっても過言ではないし、リリーナもそれを注意することはない。

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

真実の隠れ家

「ディールクー！いるかーー？」
「そんなに叫ばなくても、聞こえてますよレンさん」

エクシン城には兵士たちの憩いの場として活用される部屋、いわゆるサロンが多数存在する。
少人数用から宴会用まで用途によって部屋の大きさもまちまちとあるが、一般兵たちは畏れ多いのか、いつも5、6人用の中部屋しか使わないことが多い。
それでも部屋の一つ一つには必ず1人2人のメイドが専属でおり、どんな時間に訪ねようとも明るい笑顔で出迎えてくれることから、特に男性兵士は自室よりサロンの方にいる時間が長かったりするのだ。
それは一般兵に限らず、レンのような暇を持て余す部隊長からその暇人たちをまとめ上げる将軍職の人まで幅広い。
そんなサロンの中でも飛びきり大きな、王都の北側を一望できるテラス付きの極上の所へレンは赴いていた。

ディルクもサロン中毒者の1人で、よほどのことがない限り仕事と睡眠以外では自室には戻らない。
ただこの男のサロン使用の理由は他の男どもとは違っていて、「ゆっくりとした時間が過ごせそうじゃないですか」と紅茶片手に優雅に笑う。
どデカい部屋の中央に備え付けられている赤い布地のソファーに一目散にレンは飛び込み、、よってきたメイドに紅茶を一つ頼むと、

彼のポケットから汚い手紙を取りだして自身の左前に座るディルクに渡した。
ディルクは「これは？」とレンの顔色を確かめつつ、たたんであった紙を丁寧に広げはじめる。
この優男の流れるような長い金髪は、一瞬性別を疑うほどに手入れが行き届いていて、実際今までも女性と間違えてきた人は数知れない。髪だけで性別を疑われるような人間に、レンはいまだかつてあったことはなかった。
微笑むことしか知らないような口元は今も微笑をたたえていて、初対面の人でもすぐに警戒を解いてしまうほどの効果がある。
手紙を読む。ただ一つの動作だけでも気品が漂い、城中のメイドがディルクのことについて話させると1日中語り続けるという噂の信ぴょう性が増すように感じられた。
「…つまり、アトラスに着の身着のままで『依頼物を盗ってきました』と行っていいのかわからない、ということですか？」
レンの渡した手紙は、黒の閃光へ届けられた依頼文と、これまでのいきさつが書かれているものである。
「おー、そういうことだったのか。いや、昨日ルカとリリーナが口揃えてお前のとこ行けって言ってたから持ってきたんだけど、そこまでは考えが及ばなかったな」
ソーサーの上にちょこんと乗ったカップが、カタカタと音を立ててレンの前に手早く、丁寧に置かれていく。この城のメイドは全員厳しい「ある監督」に師事しており、誰一人として粗相をすることがないほどに鍛え…もとい、調教…でもない、教育されているので、レンのような無作法な男にも分け隔てなく心優しく接してくれるのだ。
「エルさんも行ってたんですか？どうりで昨日は下の階が騒がしいと思いましたよ」
「ついでにフウナもいない時間もあったし、責任者は大変だったろうな」

適当なレンを怒るでもなく、ディルクは小さく声を立てて笑う。
「話を戻しましょう。依頼内容などから察するに、この…『バカ』でいいんでしょうか？この集まりは黒の閃光に何らかの用があって依頼を出してきたことは間違いありません」
「なんでわかるんだ？」
「手紙にはこう書いてありますよね、『あるギルドの勢力が強いから依頼を振ってきた？』と。なぜわかるかと言えば、例え相手のギルドが強かろうと、他のギルドに依頼を振り、その事実が露見すれば体面が命である盗賊ギルドはおしまいだからです。黒の閃光のような義賊ギルドは別として、一般的な盗賊ギルドはその勢力圏から地代や統治代の名目でお金を集めているんですね。それが『自分たちでは自信がないからほかの所に任せる』とあれば、そのギルドの威厳は無くなり、人々は他の所に移ったり反逆を起こしたり、色々なことが考えられます。このことはレンさんもご存じじゃ？」
「まーそうだなー」
一生懸命説明するディルクをよそに、レンはミルクをたっぷりとカップに注ぎ、更に角砂糖を3個トプトプトプン、と投入。
これでも一応話は聞いている。
「ただレンさんの言うような、何かのギルドであるかどうかはまだ不明です。単なる不良の集まりかもしれませんし、もっと重大になるとブライト王国あたりのスパイかもしれません。いずれにせよ、注意してかからないと危険です」
ディルクはレンの知り合いの中でずば抜けて賢い知能を持っているため、少ない情報からでも今のように推理を巡らせることができるのだ。
レンや団員も彼の頭脳には全幅の信頼を寄せている。
「そうか、お前が言うんなら違いはないだろうけど……」
コンコン。

これだけ広いサロンだと、ノッカーの音も小さく聞こえてしまう。
「…っと、どうする？たぶんお前のお客さんだろ」
隠れようか？という意味での問である。
足音は聞こえていたが、まさかこの部屋に用事があるとは思っていなかったレンだったので、流石に若干焦った。
本来このような大きな部屋にただの部隊長がいるというのはあまり例がないので、もめごとでも起きたら面倒だからだ。
しかし、ディルクはその問題を至極簡単に済ませた。
「そのままで大丈夫ですよ。…ロールさん、廊下で頼める？」
「はい、かしこまりました…！」
ロールと呼ばれた、レンに紅茶を届けた茶髪のメイドは銀のトレイを持ったまま廊下に出ていった。
「レンさん、彼女、まだ男性と付き合ったことがないらしいんです。今度お話に乗ってあげてもらえませんか？」
優男には似合わない、意外と年頃の男みたいなセリフ。
「なんでオレがいつのまにか女ったらしみたいな設定背負わされてるんだよ。…ただ一つ言えるのは、かわいい女ほど手におえないってことだ」
「フウナさんに伝えておきますね」
「ディルク、何が食べたい？」
「冗談です」
くだらない会話がひと段落つくと、丁度ロールが廊下から戻ってくるところだった。
右手だけでドアを開け、右手だけでドアを閉めるという無作法を認めたディルクとレンは、一瞬何事があったのか、と思ったが、よく見ると彼女の手には、何かが握られているようなこぶしが作られている。
しずしずと、ロールが足音を立てずにオレ達に（細かく言えばディルクに）歩み寄ると、その握った手を開き、「どうぞ」とディルクの眼前にやんわりと突き出した。

その上には、ガラス作られていると勘違いしてしまうような、透き通った琥珀色をした石が乗っていた。
「ご連絡があるとのことです。おひとりで見られるよう、と言い含められましたが…」
「ありがとう。レンさんは特別だから大丈夫だよ。……それと、2人分のお茶菓子をお願いできるかな？」
「あ、申し訳ありません！すぐにお持ちいたします…」
金貨くらいの大きさの石をディルクが受け取ると、ロールは急いで茶菓子を取りに再び廊下に出て行った。
その背中を見送ると、ディルクが
「実は、王城の方でもそのアトラスという宿のことを調べているんです。先も言いましたが、スパイがいるともしれませんからね…」
彼は受け取った石を陽の光に透かしてその向こうを覗き込んでいる。薄い茶色というか黄金色というか、淡い明るい光が石を通してディルクの頬を照らし、石を傾けるたびにその色が刻々と変わっていく…。
のをレンはさっぱり気にせずに黙々と紅茶を減らしていっていた。
それに気づいたディルクはフッと笑い、
「…さて、それでは連絡を見てみましょう」

「この石を見るのは初めてですか？」
人差し指と親指でつままれる石は、レンにとってはただのきれいな石としか映らない。
レンは頷きながら、
「初めてだが…たぶん警備石みてーな奴だろ？」
「えぇ。これも魔法アイテムの一つで、情報石と言います。詳しくはまた今度話しますが、要するとこの石に覚えさせた映像と音声を見ることができるんです」
重量のある大きな木製の机の上にちょこんと情報石を乗せ、2回指

でトントンッとノックする感じでディルクは石を叩いた。

トントンッとレンは味のあるこげ茶色のドアをノックした。
外の騒がしさなどまったくこのフロアには響かず、ただ静かな空気だけが充満し、ノックの音が煩わしく聞こえるほどだ。
静かすぎる環境にはレンも職業柄慣れているが、真昼間からこんなに静かな場所も珍しいだろう。
だが最近掃除を行っていないようなホコリのたまりようが、この荘厳さをいくばくか失わせてしまっている。
「…はい」
扉を隔てているからか、籠ったような声がドア向こうから聞こえた。
男の声だ。
レンは背筋を伸ばし、のぞき穴をまっすぐ向き、
「黒の閃光です。依頼内容のことで参りました」
と告げたところ、

ガタガタガタッ。

黒の閃光、という名前を出した瞬間に、３０６号室…アトラス３階のある一部屋の中がにわかに騒がしくなった。
防音性の高い扉や壁に阻まれるために普通の人は気づかないだろうが、レンにはうるさいほどっきりと聞こえていた。
明らかに、部屋の中で何かが行われたような音である。
「どうぞお入りください」
扉がゆっくりと内側にあくと同時に、鮮明になった声と、不自然なまでに片付いた室内、そしてその中にいた男が順に確認できた。
レンの目についた男は、特に特徴のない顔立ちや背格好だったが、細く小さい目は分かる人にしかわからないほど、鈍く、心の読めない光を持っており、笑う口元が不自然に見えるほどだ。

レンは男に倣い、笑顔を絶やさずに部屋の中に「失礼します」とゆったり入室した。
こちらの図りを察知されてはいけないので、あくまでもレンは「ただ依頼成功の報告を持ってきた人」として注意しながらふるまう。もちろん、証拠品として指輪とネックレスもリリーナから預かってきている。
…自分でいうのもなんだが、結構オレって芝居上手じゃねえか？
しかし、ガチャリ、と不穏な音を立てて、ドアに鍵がかけられた。その上チェーンまでかけられてしまう始末。
「…あの？」
不自然に思われない程度に、レンは不快感をあらわにした。
「あぁ、最近は物騒なので、ちゃんと戸締りをすることにしているんです。注意はするに越したことはありませんしね」
男はにこやかに答えたが、レンはそんなものお構いなしに1つだけ置かれているベッドの上に腰を下ろし、部屋の中を観察しだす。とんでもないマイペースっぷりである。
壁には趣味の悪い絵画が2枚かかっていて、部屋の奥の机にはびっしりと辞書のような厚さを持った本の束がきちんと並べられている。カーテンも春ごろによく見られる、萌えた緑一色で、あまり男の趣味には合っていなそうだ。
これらを総じると、シーブの報告にあった部屋とはまるで違うことが分かった。
「…それで」
男は申し訳なさそうに、自分用に椅子を引っ張ってきて話を持ち出してくる。
早く証拠見せろや！とでも言いたいのだろう。
レン自身も冗長な話は苦手なので、単刀直入に切り返す。
（今はまだオレは余計なことはしなくていい…。）
「はい。結論から言えば、今回の依頼の成功を伝えに参りました。依頼文に合った2点、確かにここにあります。報酬金はこの後お受

け取りします」
そう言うと、レンは腰に回してある小さなポーチの中から、さらに小さい袋を取りだして男の前に差し出した。
男がその袋を開封して中を見ると、満足げに頷きそれを脇に置いた。
「ありがとうございました。これで、天国の2人も安心してくれると思います」
「…だまってろクズが」
「はい？」
「いえ、何でもありません」
きょとんとした様子の男は、特に言及することはなかった。
…が、うっかりしてると今みたいに本音が飛び出す。
まだだぞ…まだ我慢しろよオレ。大丈夫、お前ならできる、お前しかできない、お前がやらなきゃ誰が…。
「あの」
「…あい？」
唐突に、男が悶々とするレンに話しかけてきた。
何故か、指が不自然にクイクイ動いている。
「あなたはあの有名な、盗賊ギルド黒の閃光の方なんですか？」
「…えぇ、そうですが」
反吐が出そうな思いで男と会話をつづけるレン。心情的には盗賊ギルドじゃなくて義賊ギルドなんだが、と声を荒げたいところではあるが、驚異的な自制心でぐっと我慢。
「あの、私も黒の閃光にあこがれていて…、その、入団、希望なんですが…」
とってつけたような男のしゃべりよう。はたから見れば、なんで単なる男がいきなり俗になりたがるんだと思われるだろう。
…さすがにここまでディルクの思惑通りだと、オレもいい奴と巡り合えたもんだな、と思ってしまう。
だけど、この話をしてきたってことは、もうオレも特に我慢しなくていいってことだよな？

モジモジする男（この上なく気色悪い）に、レンは冷徹な一言を発した。
「悪いけど、オレは仲間を売るような奴をギルドには推薦したくないんでな…。今回は、ってか未来永劫あきらめてくれないかな、ベラルドさん？」
ニヤリと笑い、お前たちのやってることはもうバレてんだよ！と目で諭してやると…
案の定、向こうも残虐な笑みを浮かべ、後ろに跳び退りつつかかれっと大声で叫んだ。

知恵者の助力（前書き）

こんにちは、馬チョウ雲です！
これからは前書きにはキャラクター紹介だけ書いて、あとがきの部分にコメント入れるようにしますので、ご容赦ください！

シーブ・スト
１８歳の男性。
白と黒の混ざるくせっ髪で、赤目。
まれに寝癖かと思われるほど髪が爆発していることもあるが、本人は「こういう髪型なんです」としか言わない。
入団１年目の新人。血気盛んな若者。どこまでもまっすぐで、人を疑うことに慣れていない。双剣の使い手だが、目下修練中。

ｈｔｔｐ：／／１１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

知恵者の助力

（「おそらく奴…いえ、奴らは部屋の中に潜んでいると思います。常に注意を怠らないようにしてください」
「なんでそう思うんだ？」
「シーブの報告をも合わせて考慮すると、部屋の中には大量の武器、道具があったそうですね。とても一人で扱うとは思えませんし」）

ベラルドの声に応じ、天井から、ベッド下から、そして廊下から、計3人の覆面をした刺客がレンを取り押さえに一挙に跳びかかってくる。
自分の家ではないだけに天井を突き抜いたり、ドアを蹴破ったりと遠慮のかけらも見当たらない。
しかし、レンは抵抗するそぶりすら見せずに、なされるがままにあっという間に刺客たちに周りを囲まれてしまう。こいつの落ち着きぶりと言ったら、ベラルドに生意気をたたいた時と全く位置が変わっていないほどに何もしていないのだ。
もちろん刺客たちは驚いたように顔を見合わせ、一つ間をおいてからレンの腕やら首やらに手を回し、ベッドからおろしたかと思うと今度は床に引きずり倒し、顔だけをベラルドに向けさせた。
髪を引っ張られているのが地味にムカつく。
「あれぇ？何もしないんだ。ちょっと楽しみだったのに」
さっきまでとは態度の一変しているベラルドは、椅子に深く寄りかかり人を見下す目をレンに向けた。いつの間にかサングラスを取り出していたようで、布でそれを吹くことに余念がない。…今のところ。
「そのグラサン似合わねーと思うぞ。気づかねーのか？」

「俺様はよぉ、昔は本気で黒の閃光にあこがれてたんだよ」
どうやらベラルドはレンに似たタイプのようで、レンの中傷には耳も貸さない。我この道をゆく、と言ったところだろうか。
代わりに、レンの腕を押さえつけている奴の力が若干強まる。
「あれは１４年位前のことだったっけか。黒の閃光は、すべてを搾取する悪党！周りを認めぬ冷酷さ！自分たちの楽園を作るとか言ってたよな。まだ１５だった俺様は絶対に黒の閃光に入ってやるって思ったわけだ」
（１４年前…あぁ、あのときか）
特に気もなく１４年前に自分も思いをはせてみた。…でもあまりいい思い出ではないことを途中で思い出し、それもやめた。
冷たい床に体を押し当てられていると、腹が冷えてくる。だけど、この段階に入ったらまだ我慢だよな、ディルク？

（「もし相手が襲い掛かってくるようでしたら、何もせずにされるがままにしておいてください。向こうはあなたを殺すようなことはしないはずだと思います」
「つまり、オレに犠牲になれってコトか？ディルク、いつからお前はそんな悪い子に育ったんだ……」
「奴らはレンさんを取引の道具にしようと持ち出すはずですから、絶対に殺されはしませんよ。ですので、なるべく情報を引き出しておいてくれませんか？捕まえてから聞くのはなかなか骨が折れそうなので」）

「だが！そんな黒の閃光を悲劇が襲った」
ベラルドの演説も山場を迎えてくる。奴も熱中しているのか、自然と身振り手振りが激しくなり、好調に唾が飛ぶ。
…あっ、オレまで飛んだ！てめっ、後でぶっ殺してやる！
「今までに盗みを重ねてきたことを逆恨みされ、誰ともわからない奴らに一団皆殺しにされてしまったっていうのさ。あれほどの実力

を持った人間たちが全員殺されたということに、俺様はショックを受けた。この話は、盗賊界じゃ結構有名なんだぜ」
「…なぁアンタら。オレはいつまでこの話を聞いてりゃいいんだ？」
ただ単に聞きたかっただけなのに、オレを押さえるこいつらは全員が寄ってたかって腹や顔に蹴りを入れてきやがる。口からつばが飛んだと思ったら、床に跳んだ液体は赤い…。
血だ。
唇のあたりに鈍い痛みを感じる。しょっぺえなぁ…。
「だが、俺様はそこではあきらめない。目標となるものがないならしかたない、その1年後…だったな。俺様は自分自身で盗賊ギルドを立ち上げたのさ。すべては黒の閃光にあこがれていたから、そして自分たちがその頂点に立つために！」
「…でも、それで生まれたのがエクシンの大盗賊団（ここで笑うと唇から血がにじんだ）じゃ、苦労ないわな」
「まぁそう言うな。いずれは天下を取るんだ。わかりやすいほうが…オイお前ら、大事な道具なんだ、そう痛めつけてやるな」
ベラルドに指摘されると、ミシミシ音が鳴るかというくらいに強く、オレの腕や肩の関節をきめてきた男の手の力が弱まる。
「そしてギルドを立ち上げて、十数年がたった。だが、そこで一つ情報が入ってきてな」
ベラルドがぱちんと指を鳴らすと、部屋の中の装飾が一瞬にしてガラリと様変わりした。
これはこの宿自慢の魔法で、宿泊者の意思次第で部屋の装飾を簡単に変えることができるという高等なものである。この魔法は一等室にしかかけられていないとはいえ、それでも十分なほどに貴重だ。
そして模様替えされた部屋の内装は、シーブの報告にあった、まさに「山小屋」のような雰囲気であった。
この部屋でビンゴだな。
「あの黒の閃光が、復活したらしいという情報が数年前に入ってきたんだ！俺様は歓喜したよ。ついに俺様もその団員の一人になれる

んだ、と。…だけど、一つ気づいちまったんだ」
壁にかかる長剣を一本、ベラルドは座りながら手に取ると、途端に鞘を抜きはらってオレに切っ先を突き付けてきた。
「この勢力を持つ今の俺様なら、あの盗賊ギルド、黒の閃光を倒し、このエクシンの最強ギルドになることが出来るんだってな！」
「プッ。……クックック…アッハッハハハ！！」
レンは何の前触れもなく、豪快に笑いだした。
またしても負荷される力量が増えるが、今更そんなものは気にならない。とにかく、おかしくて腹が痛くなる。
こんなバカげた事を考える奴がまだいたなんて…ディルク、お前の想像の範囲外の奴もいたもんだぜ。
「何がおかしい！！」
自分の野望を爆笑されたことに、たいそうご立腹の様子のベラルド。切っ先が鼻に触れそうなくらいに近づいた上に、怒りで震えている。
おっと、笑いすぎて涙が出てきやがった。
「ちょっと盗みができる１０人くらいの小ギルドの天辺にいるで天狗になりやがって。こんな男にクロンやらタカとかいう奴はいいようにつかわれてたってワケか」
クロンの名前を出したとき、ベラルドの顔が少し緩む。緩むというよりかは、唇の端が吊り上ったという方が正しい。
「もうあいつらを調べ上げたのか。そうさ、あいつらは俺様のギルド員だ。まだ新人のクセによく働いてくれてなぁ。今回の仕事にはまさに適任だったのさ…」

（「情報石の報告にもあった通り、アトラスの一角を支配している団体の名は、エクシンの大盗賊団。…コアが連れてきてくれた青年たちの所属ギルドですね。指輪とネックレスはあらかじめこのベラルド・ラインという男から渡されたものでしょう」
「…どういうことだ？バカにもわかる説明をしてくれよ」
「わたくしもよくは分からないんですが、大体見当は付きます。一

つは、青年たちが何か失敗をして、それを償わせるための補償仕事と見せかけてのレンさんたちによる始末。もしくは…」）

「単にオレ達黒の閃光との接触がしたかった、か」

ほう？という風に、初めて話し途中のベラルドがレンに注目する。

「そんなところまで考えてやがったか、そう、図星だ。俺様はあんたらと直に会ってみたかったんだ。天下の黒の閃光のメンバーがどのようなものなのかって。で、あわよくばそこのマスターを呼び出して殺しちまおうとな」

そこのマスターはまた笑いそうになったが、ここは一応シリアスに通した。

でもよぉ、とまだ話は続く。

「最初にあんたがクロンを殴ったのを見たときは失敗を悟ったな。あそこには近衛兵隊長のクライスってやつがいたから、城の警備兵につかまったと思ったわけだ。考えに考えた依頼内容と、それの対象となる遺品としての指輪やネックレス…、うまく運べば絶対に黒の閃光はここに来ると思っていたが、あんたらに会う計画はまた１から練り直しだと思っていた…。だが、こうしてあんたがここに来たってことは、あれか？黒の閃光は城の中ともつながりを持っている、と…え？当たってるだろ？」

「だとしたらなんだ？それを城にでも報告するのか？」

「いやいや、俺様はそれ以前にあんたらのギルドを滅しにかかる。報告する手間も省けるしなぁ？」

我ながらいい案じゃないか、という風な表情で相変わらず剣をしまわないベラルド。

くいっとグラサンを目の近くまで引き上げ、髪をかきあげたり顎を撫でたり、自分に触ることに余念がない。

これまでの話を聞いてくると、コイツは自分の欲望のためだけに部下を使って、オレ達をおびき出してギルドを乗っ取っちまおうって魂胆だったってことだな。

…イライラしてきたし、はやく済ませちまうか。
「ったく、オレがここから逃げたら、団員全員をもってここをつぶしにかかるってのに、そんな悠長に構えてていいのか？」
「ご心配なく。俺様の本部はここの通りとは正反対にあるんでな。だけどそれはあんたらも同じだろ？」
「たりめーだ。依頼出す場所と本部が同じところだったら簡単に見つかっちまうだろうが」
この職種でしか話せないことをこうして話すというのも、なにか不思議な感じがする。
理解する相手がいるということは、相手も同じ業者であるということだからか？
「…さぁて、無駄話も過ぎたところで、そろそろ本部に案内してくれや？あんたを人質にすれば『義賊』たちはどうもできないだろ？」
「…まぁな。他人と会うために身内を売るような奴らとは根本的に出来が違うからな」
クロンやタカ達のこと、そして今までの自分の人生を振り返ると、どうしてもこのような行為を許すことが出来ないレンである。つい口調が乱暴になる。
「その事だがよ、俺様がタカに指輪とか渡して盗みしてこいってときに『この仕事をこなしたらお前も幹部にしてやる』って言ったらよ、あいつ張り切ってひったくり働きやがった。犯罪して俺様の信頼買うとか、そんなに自分が可愛いのかってことさ」
自分も盗賊である、という立場を忘れての発言なのか、完全に賊家業の人種を貶すような発言である。
こんな奴に、盗賊と義賊が同じ扱いをされてるのか…。
「…」
レンは、とうとう抑えが利かなくなった。
「そんなんだからお前は天狗って言われるんだよ」
ヒュウッ。
「あ？もっぺん言えよ」

とでも言おうとしたのだろう。だが、その言葉は口を出ることなく、ベラルドは口を開けたまま押し黙ってしまう。
というのも、開いている窓から風のように部屋になだれ込んだフウナが、ダガーをもってベラルドののど元にあてがったからだ。華麗な身のこなし、というにとどまらないその体の捌き方は、長年かけて培ってきたものが大きい。この一瞬の間に手刀を打ち込んで長剣を床に落とし、腕の関節を決めているのだから。
「な…なん」
「しゃべるな」
普段は高く明るいフウナの声も、レンの負傷の原因を作った人間に対しては際限なく冷たい。
逆手に持たれたダガーが、より一層首筋に食い込み、薄く血がにじむ。
「べっ、ベラルド！」
「そっちも動くな女！この男がどうなっても知らんぞ」
腐っても盗賊ギルドをやってきた人間だ。打算で動くことを忘れず、仲間意識だけ強い。
だが、フウナとレンの間にも、他人には理解できないほどの信頼と絆がある。
口元だけ隠すフウナは、刺客の忠告など気にも留めず、ベラルドの足を崩し、膝を床に落とした。。

それを見ると同時に、レンは「箍」を外す。
「邪魔だぞ、お前らぁぁ！」
関節をきめられて床に伏せられているはずのレンが、自力で両腕を解放して押さえつけていた2人を跳ね飛ばす。
「…！？」
「っ、なぁっ」
それぞれ部屋の壁にまで吹き飛び、背中を強打する。
残りの1人はこの数秒の間にすでに後頭部を殴り倒していて、意識

はない。
ブチッ。
振り下ろした右腕から、レンにしか聞こえない音が、１回聞こえた。
「ま、まだだ！取り押さえろ！」
「おうっ」
ひるむことなく立ち上がる、目だけをのぞかせた刺客は、壁から剣を外そうとして

外す間もなく気絶した。
言うまでもなく、レンが俊足の枠に当てはまらないほどの俊足ぶりを発揮し、クロンよろしく腹にフックを決められたからである。
ブチッ。
今度は足の方から嫌な音と感触が伝わる。
「おっ、おのれぁぁえ」
奇妙な掛け声とともに武器も持たないままレンに襲いかかろうとする最後の刺客。

パシッ。

「あ…あぁ……」
目だけでもわかるほどに、この刺客はおびえている。
何せ、全体重を乗せたストレートを、にべもなく簡単に右手だけで受け止められたからだ。
突き出した拳をいきなり受け止められて、砕けるような衝撃がコイツの腕を襲っているだろうな。
…だけど、今のオレはその程度で加減してやるほど冷静じゃない！
メキメキ…バキッ。

「う…ああっぁあぁあ！！」
レンはそのまま相手の拳を握る右手に力をこめ、刺客の手を握り砕

いた。
それも、砕いた後もやめることはなく、かえって力をさらに加えて、骨が粉になるでろうほどにまで握り続ける。
「いいか…上の人間に言われたことは、下の人間は断れない」
刺客の断末魔は、やむことがない。
「だから上は楽ができるし、下は一生懸命動いて信頼を勝ち取る」
フウナも視線をそらさずに、ただじっとレンを見つめ続ける。
「その下の奴のしている努力を笑う奴を、…オレは許さねぇ！」
レンは散々叫んだ刺客を手一本で投げ飛ばし、壁の装飾の一部と同化させた。
ブチッ。
右拳が悲鳴を上げたが、今はそれも気にならない。
ただ、体が熱く、無性に泣きたい気分だった。

「レン…もう、終わりだよ」
フウナが背中を向けるレンの後ろ姿に、優しく声をかけた。
「ん、そう…か……ぬ…ぐっ」
フウナの呼びかけではっとしたレンは、自分の体を襲う激しい痛みにも気づく。あまりもの痛みに耐えきれず、思わずとも膝をついてしまう。
「へっ、まさかこんな奴らに箍外しをつかうたぁ…。オレもまだまだだな」
「…レン…」
「…あぁ、そういや、アイツは？」
フウナは束の間黙った後、ベラルドの方を向く。
ベラルドは気絶していた。
口から泡を吹き、白目をむいて、無残にも失禁している。
…無様な姿という札を張られて売られていても、誰も突っ込む人はいないだろうというくらいに無様だ。特に、さっきまでの態度を知

っているレンとしては。
その姿をまじまじと見て、また胸のあたりに不快感を抱いた。
「クロン達が悪くないとは言わない。盗みをしたのは奴らだから。…でも、でも」
「うん、…わかってるよ、レン」
レンの言葉を押しとどめ、フウナはきゅっとレンを抱きしめた。
「…フウナ…？」
空いているレンの手は、どうしていいかわからずにわたわたしたまま宙をつかむ。
「道理と比べて、間違ったことばかりしてたから許せないんだよね。レンはバカだけど、そういうところはすごくしっかりしてるから、許せないんだよね」
「オレは、そんなモンじゃ…」
「そんなモンなの」
少し声を大にしたが、フウナとしてはまったくおこる気はない。むしろ、これくらいがレンを落ち着かせるためにはちょうどいいのだ。
「私たちもこんな仕事してるけど、全部が全部道理にかなっているっていうことじゃないもん。貧しい人からしてみれば私たちは恩人かもしれないけど、盗られる側の人にしてみればただの悪人でしかない。…でも、せめて自分たちの決めたルールは守りたい、家族は守ってやりたい、ってこと…」
「…」
当たりだ。
「義賊も盗賊も、やってることは同じ。盗んだものを自分で使うか他人に使うかだけの違い。それでも、それによって感謝してくれる人がいるなら、オレは喜んで賊になってやる、って何度も言ってくれてたし」
「…」
「あの男は自分の団員を大切にしていなかった、だから、レンも自分がそういう風な扱いをしているものなんだって周りや私たちに思

われたくなかった…。そうでしょ？」
当たりだ。
そうは口には出さなかったが、心の中では確かにそう言った。
オレは…仲間を、家族を大切にしたかったんだ。それで、身内を売ったアイツらを…。
「大丈夫、私は、私たちは、私たちのことを大切に思ってくれているレンのことが大好きだから…ね？」
…くそっ、なんで目がこんなに熱くなってきてるんだよ…。
「…がとう、フウナ」
「うん？」
レンはそれには答えず、そっとフウナの方に手を回した。

（「もしその人たちが抵抗することがあれば、捕えて城に連れてきてください。こちらで調べを取りますから。…あと、戦闘要員は部屋内ということを考えて最小限に」
「ならフウナと一緒に行くさ。呼吸が読めるのはまだアイツだけだし、城でもそれなりの身分だしな」
「2人だけだからって、あんまり見られて困るようなことはしないでくださいね？」
「アホ。あんまり大人をからかうんじゃありません」）

やっぱり、自分の部屋の自分のベッドの上が一番落ち着く。
と、レンは朝目が覚めると必ずそう思う。
荷物を取られたあの老夫婦の人たちも感謝してたし、ベラルドは逮捕。それに伴ってエクシンの大盗賊団は解散。オレがアイツから聞き出した情報が元で、本部を突き止めてスピード壊滅させることが出来たんだ。
クロン達は何日間かの禁固の後に解放されるって言うし、これで反省してくれるんならそれに越したことはない。

久々に気分良く目覚めたレンは、今日こそは二度寝をかまそうと起こした上体を再び戻そうとするが…。

バンッッ。

「レン！朝だよ！起きて起きて！！」
「…今日くらいは寝かせてくれよ、フウナ…」
ブロンドの髪を頭の横でツインテールにした、青く綺麗な目が覗き込んだものの心を虜にする眉目秀麗な美少女。
と、自称できそうなほどの美少女フウナの目覚まし代わりの絶叫とドアバンで、いつも二度寝ができなくなるのが最近のオレの悩みなんだ…。
「何言ってんの！今日からはレンの当番の週なんだよ？ホラ、朝の点呼が始まっちゃうってば！」
「クソッ、なんて世の中だ！」
オレは制服に着替えることもないまま、着の身着のままでフウナと一緒に中庭に向けて飛び出していった。
でも…。
この生活も、捨てたモンじゃない。

知恵者の助力（後書き）

はいどうも、お疲れ様でした。
この回で第1章は終了となります。
やはり最初の話ということもあって、軽く、それでいてのめりこむことが出来、これからの物語の足かけになれるような話を目指していたのですが…どうでしょうか？
個人的には最後のレンとフウナのシーンはなかなかお気に入りなんですが…。みなさまのお気にも召していただけたら幸いです。
それでは、また2章でお会いしましょう！

用事は誰かと（前書き）

ユーエルカ・プサット
３０歳の男。無精ひげを蓄える、黄土色の極短髪で黒目。

４０代を思わせる貫禄をもつ三十路。これでも妻子持ちのギルド員
＆大将軍
レンとは酒場で会い、意気投合したのち彼の本職を知り、手伝わせてほしいとギルドに参加。理屈ではなく、本能で感じたらしい。
年下のレンをマスター、フウナを姐さんとよび、心から慕っている。
２７の時に結婚。
おもにギルドではなく城での仕事を頑張る三十路だが、仕事以外の時はめったに城には寄り付かず、酒場に住む。兵たちをまとめ上げる、信望厚い大将軍の位。
愛称は「ルカ」だが、レンからは「エル」と呼ばれている。

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

用事は誰かと

「…あー、そろそろ終わるか！そいじゃ今日当番の奴は忘れないように集合するよう！んじゃかいさーん」
「うーーぃ」
とても低くやる気や覇気の感じられない応答がしたあと、ワラワラと兵練場からレンの隊のメンバーが、さもところてんのように押し出され始めた。
皆は我先にと汗を流すために風呂場（もしくは食堂）に向かうためにこうして押し合っており、その争いから漏れてしまった隊員たちはおとなしく風呂に入らず水浴びのみ（もしくはあまりもののおかずのみを食す）ハメになってしまうため、市民やメイドが考えているよりも必死に、彼らは兵練場の出口を目指すのだ。その出口が人4人が並んで通れるか通れないかくらいの広さしかないのは、何も設計者の意地悪ではない。
一方、どんなに遅く出ようが隊長クラス以上専用のだだっ広い風呂場（もしくは専属のメイドの運んでくれる食事）があるレンは、その無様な争いを周りより1段高く作ってある壇上からぼんやりと眺めていた。
そして、無意識のうちに左足に伸びている自分の手に気付き、苦く笑う。
筋肉が切れる痛みは、やっぱり何度やってもなれるモンじゃないな。
「…どうかしたんですか、レン先輩？」
「その呼び方はこっちではよしとけって言ってるだろ？ショウ」
「あ、隊長。…それで、左足、何かあったんですか？」
とうに出口争いをあきらめ、空くのを待とうとしていた集団の中から、心配そうにレンの方に寄ってきた短い黒髪の兵士…ショウは、

城の中では1割にも満たない女性兵士の一人、且つ黒の閃光構成員の一人だ。
フウナとは正反対の落ち着いた可愛さと綺麗さを併せ持つ、エクシン城5大美人の1人とも言われている女性である。
「いや、なに…。この前の事件で、ちょいとまぁ…その……」
「何か、言いにくいことでもあったんですか…？」
心の底から私は先輩のことが心配なんですと言いたげな上目遣いの目で見られると、流石にそれ以上はぐらかすことはレンにはできなかった。
なるべくショウのきれいな瞳を見ないようにしながら、
「…箍、外し、を、しちまってな。右腕とその手、そんで左足の筋肉が切れちまったとおもうんだ。…アッハッハ、まいったねぇ」
「え？箍外しをしたんですか？まさか、そんなに手におえない人たちだったとか…？」
「いんや、ちょっとムカっ腹が立っちまってな。いつの間にか筋肉が切れてたと、こういうワケだ。…さすがに家族をバカにするようなや」
「ショウちゃーん！今日の警備の後、どうよ食事とか？？」
「オイ、結構いいこと言おうとしてたんだよ、オレ？」
レンが決め台詞を吐こうとした矢先、彼女と同じく出口争いからあぶれたメンバーの一人が、レンの身を心配するショウとレンの間に割り込んできた。
見るからに軽薄そうな男で、あまり女性受けの良くなさそうな印象を受ける。
もちろん男はその前に「隊長、お疲れ様です」と断ってはいたのだが、自分の言葉に酔う（寸前だった）レンには聞こえていなかったようだ。
その男に見覚えのないレンは、聞く人に寄れば無礼ととられても仕方ないような言葉づかいで、
「てか、お前たぶんオレの隊の奴じゃないよな？これでも一応隊の

メンバーは全員覚えてっから…」
「うぇ…、バレちゃいましたか。そうです、自分はコア隊の者です」
きまり悪そうに手を後頭部に回す男。
レンはそんな男のコアという言葉に顔をしかめるところだったが、
この男に罪はない、とひとまず自分をなだめた。
コイツは運がなかっただけなんだ…そう、そういうことにしておこう。
「…で、ショウちゃんって！どう？今日ちょっといいお店予約してあるんだけど」
「お断りします」
にべもなく断るショウ。だが、その程度であきらめる男ではない。
さらにしつこく、さらにボディーランゲージも組み込みながら、
「予定が悪いのかな？じゃ明日でも」
「お断りします」
「明後日は？」
「お断りします」
「明々後日」
「お断りします」
そんな問答が5分ほど続いた結果（その間ショウは「お断りします」、レンにいたっては何も話していない）、男は根負けした様子でもといたグループの方へとすごすごと退散していってしまう。しかし男はレンの部隊でもなかったために、グループの人たちから白い眼で睨まれ、そのまま一人で兵練場の奥にひきこもり行ってしまった。
そのころになると出口争いも終幕を迎えているころだったので、グループも「ショウちゃん、先に行ってるね！」と声をかけ、のんびりとした歩調で食堂へと向かっていった。
「…それで、レン先輩、具合は大丈夫なんですか？」
「ショウ、もうちょっと男性にやさしい態度はとれないモンか？」
「はい？」
本気でわからなそうに首をかしげるショウ。

こんなお堅い性格のためか、少なくとも黒の閃光に入ってからこっち、レンの知る限りでもショウの男関係というものを目撃したことが全くない。
レンは常に「女の子ってのはいつでも誰かを好きでいる生き物」と心の中で定義づけていたため、このショウの出現というのはいい意味でレンの心境に変化を与えているのだ。
近寄る男はすべてノックアウトして、自分から男に話しかけることもあまりしないなんて…。
なかなかの強者だな、お前。
「何でもないさ…。具合だったな？まぁ前に比べれば良くはなってるな。毎日フウナが少しっつ魔法かけてくれてるから、これでも治りが早いんだ」
「フウナ先輩が…。それなら安心ですね。よかったぁ…」
フウナは魔法の心得がある。
昔から突っ走りがちなレンを技術、魔法によってサポートするフウナのその腕前は本業の魔法使いには及ばないものの、何度もレンを救ってきてくれている。
それは今述べたようなレンやほかのメンバーを何度も助けてきてくれた治癒魔法から攻撃魔法まで幅広い。
フウナの家は先祖に魔法を使うことのできた人間がいたようで、家系に稀にその血が出てくる場合があるようだ。
事実、フウナの父親や曾祖父も少しばかり扱えたはず…。あくまで過去形で、だが。
「もう…先輩はいつも一人でなんでもやりがちなんですから…。少しは私たちも頼ってください」
ショウ本人は意識しているのかいないのか、無造作に座っているレンの左足に手を伸ばして患部をさすっており、ちょっとでも目を離せば顔でもこすり付けてくるんじゃないかと思われるくらいの勢いですらある。いつくしむ心を持っているというのはとてもいいことだと思うのだが…。

他人に見られたら、コレまずくね？
がらんとした兵練場を素早く見渡し、慌てて話題を変えた。
「な、なぁショウ。お前は今日は当番じゃなかったよな？」
「え？はい、そうですけど…」
手入れの届いている、ツヤのある黒髪が返答にさらっと揺れる。
条件反射でクシャッと髪を混ぜたくなるが、ここはぐっとこらえた。
「この後、オーロジー園に行こうと思うんだ。フウナは今日は忙しくれ来れないって言うし、他の奴等も色々やることあるみたいでな。お前さえよければ、なんだけども」
「…もちろん、一緒に行きたいです、行かせてください！」
考えることもしないままに目を輝かせて賛成してくれたショウ。両こぶしを握り締め、口元が自然と緩んで先ほどまでの「お断りします」ムードが影すら見当たらない。
まだウチのギルドにもこんなに純真な子がいてくれたのか…。オレはうれしいぞ、うんうん。
そこで、自分の腹がギュルルと鳴り、レンは自分が今何を一番にすべきかを思い出した。

「…そういえば、今日は学校じゃなかったのか？」
「学校はありますけど、今日はクレットが調子悪いみたいで…。一緒にお休みするって言っておきました」
「そか。…って、アイツ1人にしといていいのか？確か…」
「寂しがり屋です。だからそのことも聞いたんですけど、『寂しいって思わせないうちに早く帰ってきてよ』って言われました」
「…アイツも素直じゃねえなぁ」
すっかり満腹になった腹をさすりながら、まだまだ上を目指そうとしている太陽がレン達を丸々照らす。
今は、オーロジー園への道すがら。くだらない会話をしていると時間がたつのが本当に早く感じてしまう。

ショウたちの通う学校とは正反対の方向、ベルノ通りに沿ってあるくレンとショウ。この時間帯は、朝採れの野菜を安く買おうとする主婦の人や、郵便物を届ける配達人の姿が顕著に目立つ。ベルノ通りはエクシンで最も青果店、精肉店、八百屋の栄えている地域であり、主婦の一メニューから一流料理人の絶品料理の材料まで、この通りを一回通ればすべてが確実に手に入るといわれているほど品数も豊富なのだ。

もちろんレン達の目的地はこの通りではないのだが、やはり売られているものに目が引かれるのは事実である。

フラフラといい匂いに誘われてレンが寄り付いた先には、肉をこんがりと焼き、タレをかけてそれを葉野菜に巻いて叩き売るお兄さんが立っていた。

その人の後ろの精肉店の中は、たいそうな混みようであった…ずいぶんと人気があるのだろう。

「…おっ、どうしたんだぃイケメンの兄ちゃん！コレ、ほしいのか？」

亡者のように現れたレンに最初は戸惑っていたお兄さんは、流石売り子、あっという間に商談をおっぱじめた。

「…ハッ。う、うまそうじゃんか…。いくらだ？」

「１つ１５０ヴェ…っと！後ろのお姉ちゃんは、この兄ちゃんのツレかい？」

明らかにレンより年下とみられる若い男性は、年齢など知ったこっちゃないと、バリバリため口で２人に話しかける。レンもショウもそういう雰囲気は嫌いでないので、レンは特に何も言わず、ショウは照れ臭そうに首を少し傾けただけだ。

かぁぁっ、とお兄さん。

「妬けちゃうねぇ！しっかたない、２つで１５０ヴェンにしてやるよ！持ってきな色男！！」

「へっ、ありがとよ」

レンはポケットから小銭を2枚、店番の男に放り投げ、それと同時に袋に入った肉巻きがポンポンとレンの方へと放り出された。
すると、男は怪訝そうな顔をして、レンを呼び止めた。
「…お？兄ちゃん、５０ヴェン多いぜ！」
「釣りだ、自分の財布にでも入れときな！」
男はまず口元を緩ませ笑ったあと、親指をぐっと立てて、新しく匂いにつられてやってきた客の相手を始めた。
「さ、園長達への土産も手に入れたし、さっさと行くとしようぜ」
「はい！」
最初からレンが買うのはお土産用のものだったとわかっていたといわんばかりの躊躇のない元気な返事が、レンの背中を押した。

「ショウはオーロジー園に行くのは久しぶりか？」
ベルノ通りから裏に入る小さな道に曲がり、後ろのショウを見た。
「久しぶりというか…、先輩に引き取られてから行くのは初めてです…かね。なんだかドキドキします…」
表通りを歩く時より距離の近くなったショウは、ぴったりとレンの後をくっついてきている。さながら、生まれたてのヒナが親鳥の後をくっついて歩いたりしているように。
右と左を建物に挟まれているこの空間は、毎回毎回通るときに圧迫感を感じずにはいられない。ソウルシーフの裏口へ回れるあの裏道より狭く感じるほどだ。
「ま、別に気構えする必要はねぇさ。今日は行って会って話して渡して帰るだけだからな」
「ずいぶんやる事たくさんあるのは気のせいですか？」
「気のせい気のせい」
クスリと笑ったショウの笑顔は、今までのレンの苦労を忘れさせてくれた。
フウナの笑顔にも似たようなものはあるが、彼女の場合はそういう感触よりも安心感の方が強い。

と言う事を前に誰かに言って、若干引かれてしまったことからもう二度と言わないようにしようと心に誓っていたレンである。
この気持ちは、決してショウにも言うまい…！

裏道を歩くこと、1分ほど。
ずいぶんとベルノ通りから離れた場所で、やっと狭い空間から解放された2人。
レンとショウのまず目に飛び込んできたのは、なかなかに年季の入った校舎だった。

用事は誰かと（後書き）

お久しぶりです、馬チョウ雲です！
なかなか久方ぶりのＳｈｏｗ　ｔｉｍｅ…じゃなくて更新ですね。
章の切れ間はこれくらい空いてしまうとは予想できていましたが、
それを連絡できていなかったのは厳しい問題点ですね。これからは
活動報告も書いていきたいと思いました。
さて、これから2章に入っていくわけですが、そんなに気張らずに
読んでいただけるよう、かつ1章よりは長めのストーリーを意識し
て書いていきます。
それでは、これからもよろしくお願いします！

施設は意外モノ（前書き）

今回は登場人物紹介はお休みです。
簡単にはさらさない、焦らしぷれいです。。。
ネタ知ってる人…いるかな？（汗）

施設は意外モノ

オーロジー園とは、古くなった学校の校舎を、そっくりそのまま保育園にしてしまった、（自称）総合保育・育成施設である。
家庭の事情で育てられなくなった子供や、捨てられた子、社会経験をさせたいという家の希望で預けられた子などが集まるが、その年齢層は結構幅広く、下は０歳から上は２５歳までおり、現在３０人。ただの慈善事業の枠に当てはまらないほどの大人数をここの責任者は夫婦で養っているわけだが、もちろんそんなアットホームな施設に無関係そうなレンがここに来たことにはちゃんと意味がある。

錆びついた柵で仕切られている旧正門を通り、レンはショウと２人、旧校舎を大きく迂回して向こう側の昇降口へと足を進めた。
建てられてからかなりの時間のたつ旧校舎の壁は茶色く変色し、雨や風にさらされたせいで少し触るだけでももろくなった塗料か何かが手につく。
表通りからかなりの距離があり、なおかつこの辺りの住宅街にも今ではあまり人は住んでいないため、とても閑静な場所なのだ。
これだけを見ればただの野ざらしにされた建物、と言うレッテルを張られるだけだろうが、その周囲、今レン達が歩いている小道や校舎のそば、もっといえばこの敷地内のレンの目に着く範囲には、雑草が一本も生えていない。これは校舎の風貌とはかなりミスマッチな光景だ。ふつうほったらかしにされた建物は、掃除すらもされないものだ。
（おっちゃんも頑張ってんだな。オレも働き甲斐があるってもんだな）
何気にこの手際に感心するレンは、足を進めるごとに大きくなってくる子供たちの声やそれを見守る大人の注意する声がたまらなく愛

おしく感じ出し、自然と歩む速度も上がっていった。
ショウも何故かそれに同意しているようで、今となってはレンよりも早いくらいのペースでてくてくてくてくてくてくてくてくと校舎周りを迂回しだす。大きめの砂利を踏み、蹴り、稚児の遊びのようにレン達も楽しみだした。
「…あーっ！レン兄ちゃんだーー！！」
いきなり背後から飛び出した大音量の甲高い声は、確かに小さな女の子のそれだった。
稚児の遊びと言う名の歩行法に夢中になるあまりに耳を澄ませていなかったレンは多少なりとも驚きとともに振り返り、そして彼にはあまり見られないような、パッとした明るい笑顔をはじかせたのだ。
「メラニー！元気だったか！？」

１０分後。
レンの膝の上には元気いっぱいの女の子、メラニーが座り、そしてショウの両手はメラニーの大親友のレソンとチーヤが握りしめて離さない。
ここオーロジー園で昔からの交流があるレンが絶大な人気ぶりを誇るのは無論のこと、ショウまでもが子供たちの注目を集めているのには理由がある。
「ショウ、久しぶりの園はどうだ？」
「はい、とても、楽しいです…！」
メラニーのほっぺたを両端にぐにっとのばすレンは、子供２人のお腹を抱きかかえて高い高いをしてやるショウの顔が終始緩みっぱなしなのをとても喜んでいた。
「私を知ってる子はあまりいないですけど、レン先輩にお世話になってから１０年間、一度もこっちに戻ってきたことがなかったので…。とても、嬉しいんです」
ショウも元はこのオーロジー園出身者なのである。

そこまでの詳しい経緯はレンも知らないが、一つレンがおぼえているのは、レンのある「行為」をまだ幼いショウに見られ、そこからショウがその「行為」に興味を持ち始めた、という何ともレンとしてはどうしていいのかわからない思い出だけだ。
気難しいことを考えていると、敏感にも不安を感じとったのか、メラニーが座ったまま首だけ動かしてレンを見上げてくる。
「レン兄ちゃん、どうかしたの？」
くりっとした大きな金色の目は、なんでも見透かしてしまいそうなほどにきれいに透き通っている。まだ口の中に指が入ったままなので、少しあふあふした話し方になった。
「レン兄ちゃん？」
「…うぅん、何でもないぞ。ちょっとボーっとしててな…それよりさ、おっちゃんどこにいるか知らないか？」
「さっきまでここにいたよ！」
ショウに抱かれるレソンが至近距離にもかかわらず耳をつんざくような大声でレンに教えてくれた。実際、耳が常人よりはるかによいレンがこの声を聴くと、しばらくの間常人ほどの聴力に戻ってしまうほどにレソンの声はデカイ。
それでも特に不自由はないのであえてレンは何も言わないのだが。理解ある大人を演じるのも普段やりなれていないだけあり大層疲れる。
「そうか、ありがとなレソン。…だけど、なんでも大声でいうのはちょっとやめといたほうがいいぞ」
「なんでだ？父さんは大きな声が一番元気な証拠だから、ずっと声を大きくしてろって言ったんだよ？」
ちなみに、父さん、と言うのはレンの言うおっちゃんの意である。
「それでもお客さんが来てるときは静かにふるまうのが大人ってモンだ。レソン、お前はまだまだ子供ってことだな？」
「違う！大人だ…もん…」
自分で言っているうちに気付いたのか、だんだんと尻すぼみに声が

小さくなっていくレソンの顔は、一つ自分が大人になったことを誇るかのように頬が緩んでいた。

ガララッ。
レンの座っている後ろ側、さっき入ってきた部屋の入口の扉があく音だ。レンはすかさず首を後ろにぐぐいっと回す。
その滑りの悪い引き戸が開くと同時に、今しがた農作業を終えてきたような農夫の姿がレンには確認できた。顔は黒く日焼けしていて、パッと見ると目の部分だけが白色が目立って浮き出ているような感じだ。その見た目と対応するようにガッチリとした体形が一回見ただけでもわかるくらいである。
「どうしたどうした、レソンの声が聞こえない…が…」
麦わら帽子をとりながら部屋の中を見たその男性は、おおおっ、とレソンに負けないくらいに大きく歓声をあげた。
「レン君じゃないか！よく来たよく来た、とにかく、茶でも出そう。おいクラム！お茶を出してくれ！！」

さらに１０分後。
子供たちは外で遊ぶよう急かされ、今はオレとショウ、そしてシドのおっちゃんとクラム母さんの４人だけで部屋を茶飲み場として使っている。
…が、チラチラ窓の外から子供たちがのぞいてくるから、正直あまり落ち着かないのが事実だ。
「久しぶりだな、レン君」
首からかけたタオルでせわしなく額を流れる汗を拭くシドは、言われなければこんな施設の園長だとはだれも気付かないだろう。おそらく１００人中１００人は農夫と答えるハズだ。
「そうだな、久しぶり、おっちゃん」
「それにそちらの女性は…忘れもしない、ショウちゃんだね？」

「え、は、はい…」
意外そうにショウは言葉を濁し、オレに助けを求めるような横目を使ってくる。
オレはわざと肩をすくめ、流し目で椅子に座る女性へと説明を託した。
「ウチの旦那をなめちゃいけないよ？女の子の顔なら何年間たってようとすぐに見分けちゃうんだから」
シドの隣に座り、こぽこぽと苦いお茶を入れてくれるこの女性はシドの妻で、同じくオーロジー園を切り盛りする豪快肝っ玉母さん、クラムである。
「かくいう私だって、ちゃぁんと覚えてるよ？ショウちゃん、とっても世話見のいい大人っぽい子だったけど、いまでもそうなのかしら？」
はい、と消え入りそうな声で精いっぱいの気持ちを答えたショウ。だが恥ずかしい感情とは裏腹に、ずいぶん嬉しそうに口をニヤつかせていた。
「まーあれから10年だもの。ショウちゃんも大人になるし、レンちゃんも更にかっこよくなってるし、二人とも、異性の子が放っておかないでしょ。…はい、お茶よ」
世話焼きのおばさんをそのまま描いたようなクラムはお茶を出しながら、お菓子を食べながらも2人と話すのをやめなかった。主にここ最近のことや、昔の邂逅など、思いつく限りのことをクラムは話題として提案し、それにレン達も朗らかに話しすすめていく。
やがて3杯目のお茶が注がれる頃、レンは自分の要件をハッと思いだし、「それで近頃はキュウリの栽培も初めて…」と自家農園のことについて語り始めたクラムに横から自分の話題をねじ込んだ。
「ちょっ、クラム母さん。オレの要件忘れちゃいそうだから、先言ってもいいかな？」
「あら、悪かったねぇ。おばさんになると自分のことばっかり考えちゃうから」

今年で確か４３になるクラム母さんは、４３歳と言われても一回は疑ってかからないとわからないほどに若く見える。
同じようにシドもよく４０代前半に見えるといわれているが、本当は５２歳なんだけどな。
そして、あらかじめ要件を察していたシドも、やっときたか、と言ったような表情で改まり、背筋を伸ばす。
オレはショウに「あそこのオレのポーチ持ってきてくれ」と頼み、オレの方を向く2人の目を見た。
「けっこう前から間隔空いたから、心配になっててさ…。お金の方は、大丈夫？」
「大丈夫だとも。前にレン君が持ってきてくれた量で半年間生活が成り立っているんだ。もちろん私の野菜作りとクラムの市場での売却額も入れて、だぞ？決して頼りきりではなく」
「いやいや、別に避難してるんじゃないって」
レンとシドは同時に苦笑いし、そしてすぐ真顔に戻り、窓の向こうを射るような視線で睨んだ。今では先まで窓際でチラチラ視界に入ってきた子供たちがグラウンドで遊ぶ姿が確認できる。
「…子供たちはいないようだね」
「そうみたいだ。…ん、ありがとよショウ」
ショウから渡されたポーチから、レンは一つの茶色く変色した厚い封筒を取り出し、シドに向けた。
ちなみに先ほど買っておいた肉巻きは、すべて子供たちにとられてしまっている。
「…はい、コレが今回オレの持ってきた分だ。前回と同じか、それ以上はあったと思う」
「いつもすまないな…レン君」
「いいんだって！これはオレが好きでやってることなんだって、毎回言ってるだろ？」
レンは差し出した封筒を握らないシドの手を無理やり取り、しっかりと握らせた。

シドの手にずっしりとした重さがのしかかる。
「……いやらしい話だが、いかほど入っているか、確認してもいいかね？」
「えと、数えてくれたのがフウナだから、間違いないと思う。…８０万ヴェンだ」
「はち！？」
「しっ。…あいつらに聞こえちまうって」
「あ、うむ、すまないな、興奮してしまって…年甲斐もないことだ」
タオルを持ち上げ、顔全体を何回も拭きなおすシド。

レン達が義賊たる所以は、まさにここにある。
盗賊と義賊の違い、それは、自分のために盗むか、他人のために盗むか、である。
レン達は依頼を成功させてもらう報酬金、もしくは得たお宝の売却額の半分をオーロジー園に提供しているのだ。
今回の場合は奪還任務の報酬金（としてレンがエクシンの大盗賊団からまきあげた金）の半額、２５万に加え、クロン達がもっていた指輪やネックレスが思いのほか高く売れ、その分の金４０万ヴェンも追加されているので、それプラス半年の積み重ねた報酬金でこれだけの額になった、と言う事である。
この資金提供がなければ、いくら自分たちで義賊だと言おうと、周りはそうは認めてくれない。それに、下手をすれば自分の命に危険が及ぶこのような稼業で、更にその金を他人にのために盗ってくるともなれば義賊の人口が減っていくのも揺るがざる事実である。
レンが何を思って義賊ギルドを立てたのか、それはごく一部の人間しか知らないことだが、そのギルドの資金提供先がオーロジー園になったことは、レンは常日頃から語っていることに由来する。
「やっぱり、子供は無条件で幸せでなくちゃいけないと思うんだ…。理屈じゃなくてさ」

「それは、私たちとて思っているとも」
重くうなずくシドとクラム。２人ともに子供好きで世話好きと言う家族の長たる資格を備えている性格であり、レンもこの人たちには一目と信頼を置いている。
ショウはこの取引現場を見るのは１０年前を除いて今日が初めてなので、その時とは立場も何もかもが違い、レン達についていけずに若干当惑しているようだった。
ショウは幼少期にこの取引現場を偶然目撃してしまい、それを説明したシドによって語られたレンの行動に心からあこがれ、レンについていくことを決心したのだ。
それから１０年…。ショウは、涙を流すクラムを見、やはり私もレン先輩の力になり、こうして助けることが出来てよかった、と困惑しつつも心からそう思っていた。
『平気か、ショウ？』
突然聞こえた小声に頭を上げると、レンがシド達を見つめたまま口だけを動かしていた。
非常に時機を読んだレンの言葉に、思わずショウは目頭が熱くなった。…本人は無自覚に言ったのだろうけども。
『はい…私、先輩たちと一緒に仕事ができて、とても幸せです……』
ショウはそれから、シド達と冗談をかわし始めたレンの背中を羨望のまなざしで見つめ続けた。

「レン兄ちゃん、ショウお姉ちゃん、もう帰っちゃうの？」
メラニーが足に組みついて離れないまま、かれこれ２０分間は彼女を説得しているだろうか。
いくらシドが「また来てくれるよ」と言っても、いくらクラムが「クッキー焼けたわよ」と釣ろうとしても一向に手の力を緩める気のないメラニーに困らされるのはいつものことだが、今回は新しい客、ショウもいるとだけあってこの食い下がりもいつにもまして長引いた。

「メラニーちゃん、これからレン先…レン兄ちゃんはね」
レン兄ちゃん、と呼んだとき、これもいいかも…とキュンとしてしまったのはヒミツ。
「レン兄ちゃんは、お仕事があるの。とーっても大事なお仕事で、休むことが出来ないの」
「…いや、別にあんなの誰かにやらせてもいいんだが」
思わず本音の飛び出してしまったレンは、声なき反論、つまり気だけで「静かにしててください」というショウに圧され、口を慌ててつぐんだ。
「また今度、お土産持ってくるから、その時はまた一緒に遊びましょうね？」
「遊んでくれるの！？」
その言葉を待っていたとばかりにメラニーは食いつき、目を輝かせてレンの足から飛び退いた。その素早さたるもの、飛び退いた、と形容しなければ表せないと思ったほどだ。
「じゃあね、レン兄ちゃん、ショウお姉ちゃん！また一緒に遊ぼーね！！」
「おぅ、ちょっとは足早くなっとけよ。…そいじゃおっちゃん母さん、また来るわ」
「バイバイ、メラニーちゃん。…お二人とも、今日はお邪魔しました」
メラニー以下十数人の子供たち一人一人と別れを告げに行ったレンと別に、ショウはオーロジー夫妻と話す時間を持った。
「ショウちゃん、私たちはこれでも家族なんだから、敬語なんて使わなくていいのよ？もっとくだけてくだけて」
「は…う、うん。でもこの敬語って誰にでも使っちゃうクセで…」
「それでもダメよ。母親の言うことに間違いはあまりないのよ」
「あまり、ですよね？」
「それも、言っちゃダメよ」
「いんやぁ…こんなに年を食うと、時間がたつのが早く感じてな。

あの時うちにきたショウちゃんがもうこんないい大人になってるなんて…。年はとりたくないもんだ」
「そんな、まだまだシドさんは若いですよ」
「はっはっは、そう言われると、まだまだ引退できないと感じるな」
目を細めて、子供たちに囲まれるレンを見て感慨にふけり始めるシドとクラム。二人とも本当に子供が好きなのだろう。ショウが来てからこっち、レンやショウと話していない時はいつでも子供たちの方に気にかけているのだから。
レンはキチンと子供に一人ずつあいさつを交わし、頭を撫でて「元気でな」と声をかけている。そんなレンを見、次にこっちに来れるのはいつなんだろう、と、ショウも心惜しげにそう思った。
「…ショウ、行くか！」
「はい、行きましょう！」
最後の一人の頭を撫で終え、レンがショウを迎えにくる…とともに、どどどどっと小さな軍勢たちもいっしょにくっついてきた。
「レン君はとても人気者でね。私なんかよりもここにいてくれた方がいいのに」
「ハハハ、あんましそういうこと言うと、本当に来ちまうぜ？」
「それは勘弁願いたいな」
レンがこっちに戻ってくるときにも足にくっついたメラニーをシドが引きはがした。
「こんな時間になってしまったが、仕事の方は大丈夫か？」
レンはふと空を見上げた。
お日さんがあの位置ってことは…3時くらいか？
「3時を少し回ってしまったようだな、すまない」
おっ、オレの感覚もまだ大丈夫だな。
手持ちの懐中時計をポケットにしまいなおしたシドが申し訳なさそうに頭を下げる。
「いやぁ、とんでもないって。昼飯までごちそうになったんだし、それにまだ仕事には十分間に合う」

レンはマメのできている右手をヒラヒラと振り、その後メラニーの頭を最後に2回、ポンポンと軽くたたいた。
「また来るよ、メラニー」
レンのあいさつを皮切りに、園員全員が一斉に声を張り上げた。
「じゃあねー！！」
「ばいばーい！！（１０人以上）」
「今度はあまり時間かけずに来ておくれよ」
「風邪ひくんじゃないぞ！」
「…次からは、もうすこし音量について考えといてくれよな」
キーンとする耳を押さえ（ショウは学習していたのか耳をすでにふさいでいた）、大手を振ってみんなに別れを告げた。
「レン先輩。次はいつ来られるでしょうか」
ショウは名残惜しそうに何度も振り向いては手を振りかえし、前を向くがまた後ろを振り向いて手を振りかえす。
レンもそれに倣い、何度か振り向いては手を振り、やがて路地の奥の方へと消えて行った。
「次、か？そうだな、あそこに入れられるだけの報酬が入ったら、だな」
「私、がんばります…。私のためにも、みんなのためにも」
ここでレンは、少し意地悪してみた。
「でもよ、オレ達が頑張るとそれに反して不幸な人間も出てくる。賊って言うのはそういうモンだ」
この問いは、レンが昔ある人から問いかけられた言葉なのだ。
当時のレンも、今のレンも確かな信念を持っているためにこんな問い、と思っていたが、案外他人にはそういう事にもいかないらしい。
実際、その時一緒にいたフウナは答えに詰まってしまったのだ。
しかし、レンの予想とは裏腹に、ショウはハキハキとした声で、自信を持って答えた。
「私たちは、盗まなくてはいけないところ、盗んでもよいところからしか盗みません。だから、それによって悲しむ人と言うのは盗ま

なくてはいけないところの人間です。…レン先輩、意地悪です。でも私の意見も、許されますよね？」
意外な返答にレンは刹那たじろいだが、すぐに余裕のある笑みを浮かべ、
「一般的な考えからすればそれは根本から間違っているが、オレ達からすればまったくの真実だ。オレも似たような考えだし、そうだな、お前の言うとおりだ。意地悪して悪かったな」
すまんな、と言う意味で、メラニーたちにしてやったのと同じように頭を撫でようと、すっと右手を伸ばした…が、すんでのところでそれに気づいたショウが身を捌いてかわしてしまった。
「！」
「っと、なんだ、やっぱり男からは触られたくないクチか？ま、仕方ないさ」
「…あ、ぅ……」
自分が反射的に何をしたのか、まだ理解がつかないようなショウ。その真正面に、苦く笑うレン。
「ち、違うんです……ぁ」
「まま、それは仕方ないことだろ？ゆっくりなれてきゃいいさ」
どうやらあらぬ方向に勘違いしてしまっているレンは、「な？」とショウを気遣った。
むなしく突き出した手をそのまま後頭部に回したレンと、一瞬の間に顔を赤くしてしまったショウ。まったく未練なさそうにまた歩き出したレンの背後で、ショウが、「…頭、触られるの弱いんです……」とつぶやいたのは、レンの懐で震えた警備石の振動音によって彼が感づくことはなかった。

施設は意外モノ（後書き）

こんばんは。馬チョウ雲です！
２週間とちょっとぶりの更新、お待たせしました！
自分が少しサボり気味なこともあり、皆様には本当に失礼をいたしました。
週１ペースでの更新を目指してこれからは邁進していきたいと思います。
ありがとうございました。

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

来訪者は人外（前書き）

コア・ハーヴェスト
男の３３歳。
前髪の真ん中が白くなって、後は黒。「そこだけ白髪なのか、はたまたそこだけ白く染めたのか」と言われ続けているが、本人は染色だ、としかいわない。
軍隊長で、レンのことが嫌いで仕方がないらしい。傭兵業をしていたこともあり、なかなか腕が立つ謹厳実直なオジサマ。実力があれば年齢関係なく敬の念を持つことのできる素直さもあるのだが…。
ｈｔｔｐ：／／ｌｌ９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
ブログ

来訪者は人外

「オイ、何があった？」
オーロジー園から全力で駆け抜けること15分ほど、エクシン城の正門でレンの帰りを待っていた門番たちが安堵の表情を浮かべた。
「詳しいことは聞かされておりません。しかし、場内を警備中の人員から隊長のお部屋へ来てほしい、とのことです！」
「よっしゃ、ありがとよ！」
この時点でやっと追いついたショウを「もちっと走るぞ」と急き立て、またもや全力ダッシュ。
ショウも体力が低い方ではないが、レンと比べられてしまうとやはりそのか弱さが目立つ。額に汗をびっしり浮かべ、息が荒くなっている。内股の膝に手をつき、肩で息をしてそれでも一生懸命レンにくっついてまわる。
一方、先を走るレンは底なしかと思われるくらいの体力を無尽蔵に消費せんとばかりに大股で城の低くはない階段を3段飛ばしで駆け上がっているところだった。
戦闘中ならいざ知らず、走るだけの単純な運動であったらそんなに苦に感じない彼は後続のショウを待ってまた走り出す。
非常事態かと思って走って帰ってきてみればあまりそうでもなさそうな雰囲気だったので、レンも内心若干安心していた。
しっかし…なんでオレの部屋なんだ？

3階。
レンの部屋の前にはレン隊の警備兵数人が待機していて、部屋のドアが開け放たれていた。

中からは「うわっ」や「痛てててて」とかいう悲鳴のような声も聞こえてきていて、さっきの安心もどこへやらと行ってしまいそうになったレン。
その内の1人、茶髪を後ろでまとめた青年がレンに気付いた。
「隊長！お帰りでしたか」
「悪い、待たせたな」
レン隊副隊長を任されているドルイトは、レンと疲れ切ったショウにキチンと敬礼をしてから報告をしてくれた。
「ここの警備をしているものから連絡がありましたでしょうが、なにか隊長の部屋からガラスの割れる音、その後にずっと物音がする、との事でしたので…勝手とは思いますが、部屋を開けさせてもらいました」
「構わない。で、どうなってたんだ？」
泥棒か？と聞いたが、ドルイトは首を横に振る。
「見ていただければわかると思います…おい、道を開けろ」
部屋の中を覗き込んでいた隊員たちは隊長の帰りを確認し、どこか安心したような顔つきで道を開けてくれた。
それほど対応に困るようなものなのか？
レンはそう危惧し、自分の部屋なのにあたかも女性の部屋に入るときのように慎重に慎重を重ねて覗き込んだ。

バサバサッ。

「こ、このっ！おとなしくし…いって！」
「バカ、あんまり暴れさせるな！部屋の中が汚れるだろ！」
バサバサッ。
一瞬、レンはとても気の抜けた顔になる。多分、ショウもこんな感じの顔になってるだろうな。
というのも、レンの私室では警備兵2人が1羽の鳥と格闘を繰り広げていたからだ。

その鳥は一般に知られているスズメやカラスとは違って非常にサイズの大きい、見る人が見れば怪物と言われても仕方ないくらいに大きさの違う鳥だった。
色は黒と赤がちょうど割合的に半々といったところの、勇壮なイメージを受けるような、そんな感じ。
だけど飛び方がおかしい……アレ、羽から血が出てんのか。
それとほぼ時を同じくし、、レンの目がその鳥の足に止まった。
「ぬううう、そりゃあああああ！」
「グケッ、ケアア！ケアア！」
兵の1人が重い鎧を脱ぎ捨て、肌着のままに鳥へと飛びかかり、上から全体重を持って押さえつけた。なおも鳥は抵抗を続け、バシッ、バシッ。
何度も顔を大きな翼でたたかれぶたれるが、歯を食いしばって兵はそれに耐えている。もう1人も加勢するために2枚の翼を押さえようと躍起になり、脛を打たれて床にもんどりうって痛みを叫ぶ。
それを茫然自失と見ていたレンは、その鳥の翼に目をやり、急にピンときた。
「ドルイト、フウナ将軍に連絡を」
「もうしております。今しばらくのちに来ていただけるそうです」
もちろん私もわかっております、と言う感じに唇を引き結ぶドルイトは、この上なくレンにとって頼りになる部下の1人だった。

「ここね？任せて」
ドルイト以外の兵とショウを通常警備の配置に戻して代わりにフウナを迎え入れ、今そのフウナはおとなしくなった鳥の翼を治療し始めた。フウナの手が黄緑色の光を放ち始めると、羽が剥げ、血があふれていた翼の、えぐられたような傷が少しずつ小さくなっていく。
レンが筋肉の切れた部分に毎日かけてもらっている回復魔法である。
5分もかけ続けると、その部分にあった傷はすっかり点ほどにまで

小さくなり、出血も止まった。その上傷のあった部分には既に産毛が生え始めていた。
「これは傷を治すだけの魔法だから、飛べるようになるまではまだ結構かかると思うわ」
ここに来たときに少し疲れた顔をしていたフウナは今はすっかり治った翼に驚くように足でぴょんぴょん跳ねる鳥を嬉しそうに眺め、大きく息をついた。
「…それよりも、私は隊長の部屋の方が心配かと思われますが」
「奇遇だな。オレもそう思ってたところだ」
ドルイトの報告に「窓の割れる音」とあったように、レンの部屋のやや大きめの窓が窓枠のみを残して、ガラス部分が床に散乱している。ほかにもシーツや壁に鳥の血がついていたり抜けた羽が落ちていたり、なにかの殺害現場のような光景であった。
少なくとも、オレはここで寝たくはない。
「将軍、新規で部屋の申請ってできる…ましたっけ？」
一応部下の前ではフウナに敬語を使うことは忘れない。
フウナも危なっかしいよ、レン、というような表情を一瞬つくり、また普段通りに戻る。
「進言はしておきます」
「ありがとうございまふぅ」
言葉の最後はにため息になって出ていった。進言はしておく、という意味は、つまりしばらくの間ここで我慢してくれと言う事なのだ。
そりゃため息も出るだろ…ハァ。
しかも……、こんな厄介モンまで出てきやがったしな。
レンはポケットの中で自分の手を握り締める。
「ドルイト、廊下に誰もいないか？」
「？…お待ちください」
首をかしげたドルイトは素早く身をひるがえして血の飛び散っているドア向こうを覗き、人が1人もいないことを確認した。
「大丈夫のようです」

「ありがとよ…じゃ、適当に座って」
適当に、と言っても本当に適当に座れそうなところを見つけるところが難しいことは言いながらも理解できる。
少し待つと、2人ともに椅子のカバーをはがしてその上と、ベッドのマットレスを裏返してそこに腰を落ち着けることが出来た。が、もはやレンがここで生活すると言う事は2人とも考えてくれていないようである。
「…こいつが、さっきの鳥の足についてたんだ。見てくれ」
「足…？」
「手紙だ。しかも、結構重要な事かもしれん」
フウナが代表してそれを受け取り、小さく丸まっている紙を伸ばし、ドルイトと一緒に目を走らせる。
それを見て、親切にもドルイトは声を出して朗読してくれた。
その口調は、緊張感にまみれていた。
「『親愛なる王国兵の諸君へ。先日は我らの同志が世話になった。突然で悪いが、彼らの身は私たちに返してもらった。元々私たちの仲間だ、文句はあるまい。その代わりと言ってはなんだが、いくらかの気持ちを贈らせてもらった。これからも相見えることがあるだろうが、その時は互いに自分の心を通しあうことになると思う。最後に一言。……私たちギルティオゥヴァは君たちの命をいつでも狙っている。』あとには何も書かれていません」
「……」
フウナはただ押し黙り、ドルイトは必死に歯を食いしばって感情を外に出さないようにしているが、そんなもの一目で判断がついてしまう。かなり怒っている。
「…隊長」
「まっさか自分たちの名前を出してきてくれるとは、手間が省けるじゃんか」
あくまで明るくふるまうようにいつも心がけてるけど、やっぱし胸糞悪いのは仕方ないよな。

「だから将軍はここに来たときにあんな疲れた顔だったんだ…ですね」
フウナが小さくうなずく。
「今日の朝にいつもの通り見回りに向いたら牢が開いていて…。その中にはもう、ベラルドの姿はいませんでした」
オレは心の中で舌を打った。
そして、オレは恐ろしい想像をもしてしまったんだ。
「…まさか、ほかの奴等は？釈放されたんでしょう？」
「今私の部下を向かわせていますが…おそらく……」
「なんという…！」
ドルイトの絞りに絞り出した声が、レンの気持ちを代弁している。
レンだって似たような心境なのだ。
「…それでも、城の人員に直接的な被害が出ていなかったのは幸いでした」
諦めたように首を振ったフウナが、手に抱える鳥を慎重に扱いながら立ち上がる。
「誰も、何もケガなどしていないとおっしゃるのですか？」
「ええ。今日の夜半から早朝まで、そしてその早朝から朝の訓練時間まで、そしてその時間から今の今までで負傷した、もしくは死亡が確認されているレン隊はいません。……もちろん、このギルティオゥヴァという組織の関連していそうな人間を見た者もいませんでしたが」
「…で、それをオレに言って何があると？オレの頭の悪さは知ってるでしょうに」
皮肉っぽく口をすぼめると、フウナ並びにドルイトの顔に、やっと小さいながらも笑みが戻ってきた。
「一度秘密裏に参謀官に相談しに行きます。お2人とも、コレのことはくれぐれも秘密にお願いします。いずれ皆には知れてしまうでしょうが…。あと、勝手にこの団体の調査などの行動は起こさないよう、重ねてお願いしますね？」

最後のはおそらく将軍からの命令、と言うよりは私からのお願い、みたいなモンだろ、フウナ？そんくらいは分かってるさ。
簡単に城の中に入って誰にも気づかれずに人１人を逃がすことが出来るような人間たちだ、もしかすると、オレ達の今のこの行動もすべて把握されてるかもしれない。
そんなときに勝手に行動して罠にはまるようなあっちゃ、完全に術中だもんな。
自分の悪い頭でもよく理解できたなぁと自分に感心。
そのフウナの言葉に男２人はにべもなくうなずき、レンはドルイトにフウナを参謀の所にまで送らせた。
今夜にでもアイツになんかおごってやるかな、うん。

さて…。
この鳥、どうしたモンかな。
さりげなくフウナがベッドの上に横たえていった、目をつむって眠っている大きな鳥へと考えを巡らせ、頭が痛くなった。

コンコン。

「……ルーマン、いるか？いなくても入るぞ」
「はい、どちら様…って、あれ？レンさんじゃないですか！こんにち」
「挨拶はやめて、コイツを見てくれ」
無遠慮に部屋に入り無遠慮にどんっ、と効果音が出そうな大きさの鳥を背中に掛けた布から見せると、この茶髪の１７歳の青年は目を飛び切り大きくして、紙に走らせていたペンを床に落としてしまった。
「これって…レンさん、この子をどこで？」
何かを知っているような口調のルーマン。机に広げている本やら紙

やらがありありとレンの目に映る。……なんだこれ、何語だ？
「ついさっきオレの部屋に飛び込んできた。フウナが羽を治療してくれたんだが、まだ当分は飛べないらしい」
手紙がくっついていた、と言う事実は伏せておいた。
で、オレにはなんだかわからんからお前に聞きに来たんだ、と話し終わる前に、
「レンさん！これ、これ、小朱雀ですよ！」
「あ？コチュジャン？」
「こすざくですって！」
ルーマンはとても興奮した様子で、一回長くもない前髪をかき上げて机の横の本棚をあさりだし、すぐさま一冊の分厚い本を取り出したかと思うと、狂ったようなスピードで本をめくり、ものの1分もしないうちにレンの手に抱かれている鳥と同じ鳥が書かれているページを差し出してきた。
「小朱雀…」
「はい、小朱雀です」
何がそんなに誇らしいのか、胸を前面に張り出してそのページを読むようレンに勧めてきた。
「小朱雀…、全長は2メートルにもなる。不死鳥の名を持つフェニックス、朱雀によく似た姿形から小朱雀と呼ばれる。主に木の実を食し、昆虫などを食べないある種高潔なイメージをもたれる。ひどく警戒心が強く人にはなつかないとされている」
「はい、そうなんです。人にはなつかない、と書かれていますよね？でもこの小朱雀を見てください」
レンは今一度、自身の手の中でゆったりと眠る小朱雀に視線を落とした。
「この落ち着きよう。おそらくこの鳥はレンさんに気を許しているんですよ。これは凄い！レンさん、ぜひとも観さ」
「ちょいちょいちょいちょ」
興奮で饒舌になってきたルーマンを押しとめ、今度はレンが滝のよ

うに言葉をあふれさせる番とした。
「要するにこれをオレが飼えってのか？なかなかそりゃ大変な事なんだって、知っての通りオレもお前も黒の閃光という生き物にはほとんど関係ないような職種だし城の方だって一般に考えられるより大変な仕事なんだしそれに加えてよくわからない高潔な鳥を自分の物にするって？冗談はよしてくれよオレだって」
「小朱雀の羽はコレクターに売れば、状態にもよりますけど1枚5万ヴェンで売れることもあるんですよ？」
「そういえば最近独り身で寂しいと思ってたんだ。コイツをコチュジャンと名付けて以後オレのパートナーとしよう」
手のひらをひっくり返すように態度をころりと変えたレンを責めるでもなく、ルーマンは落ち着きを取り戻してゆっくりと考察に入った。
「小朱雀はアマテラス王国にわずかにのみ生息する貴重な鳥です。この季節、秋から冬にかけては木の実が豊富なこちらの国へと飛んでくることが知られています」
「…1枚、2枚、おお、たったこんだけで10万…！」
「しかし、小朱雀は肉眼でギリギリ見えるかどうかの高い所を飛ぶような鳥です。それに小朱雀は、先ほども言いましたがアマテラス王国でもここレヴァンスでも貴重な鳥です。間違ってもケガをさせるより捕まえて売りさばく方がよっぽど良いはずです」
「あー、コイツのメシはどうすっかなぁ…あ、イヴにでも拾わせに行くか」
「ちょっとレンさん？」
「冗談だって」
「レンさんが言うと冗談に聞こえないから怖いんですよ」
ふふっと小朱雀の頭を撫でるルーマンは、再び机に向かい、勉強を始めた。
今までより5倍ほど扱いに気を付けてコチュジャンを背中に背負い直したレンは、部屋を出る間際にルーマンに声をかけた。

「…別に、お前だって学校に行ってもいいんだぞ？金の心配はするもんじゃないし、それくらいオレの給金でどうとでもできる」
「いえ、そうは言ってもやっぱり僕って気にしちゃう性格なんで…ありがとうございます、気持ちだけはもらいます」
ルーマンは将来有望視されているとても頭のいい青年で、黒の閃光内でもかなりの古株メンバーである。しかしあまり盗賊方面に興味はないらしく、現在では城の参謀官を目指して日々勉学に励む中途だ。
そして、恋多き年頃のうぶな青年でもあったりする。
「…あぁ、レンさん、一つ忠告が」
「ん？」
カリカリと筆を進ませた格好のままにルーマンがレンを呼び止めた。
「小朱雀は強大な魔力を持っていたとも言われています。あまり乱暴にしたりすると…」
「こ、心しておきます」
急に恐ろしくなったレンは、それまでより更に5倍慎重に歩くハメになった。

来訪者は人外（後書き）

あーいどうも、馬チョウ雲です。
この次あたりから2章が本格始動していくと思います。
打つのに疲れてしまったので、また今度お会いしましょう！
したらな～

城はヒマ（前書き）

シルタ・オッフェン
１６歳の女性。普段高い位置で結んだ金髪のツインテール。これはフウナにあこがれての髪型。ソウルシーフの看板娘で受付嬢。普段はとても丁寧な言葉遣いや行動をするが、怒ると怖い。大人びていて、ダンとともにカウンターを切り盛りしている。ほかの人に比べシルタはダンに対して寛容で、ダンもことあるごとにシルタにはお礼をしている模様。団員にしばしば付き合わされるため、お酒にはメッチャ強い。

ｈｔｔｐ：／／ｌ１９ｈｔｎ１ｎ９．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｂｌｏｇ

城はヒマ

小朱雀に暴れられてもどうなるか知れたものではないので、レンはすれ違う兵たちに好奇の目で見られながら、エクシン城の屋上へと一人上がってきた。
3階から4階を通過して屋上へ上がるには垂直に立つ梯子を上らなければならない。
それに加えて梯子のあるスペースは人が2人入れないくらいのスペースしかないので、背中に厚みがある分足も曲げづらく、非常に登りづらかった。

すり減った革靴で屋上の真ん中あたりまでいったん出て、襷のようにかけていた布をゆっくりほどき、下におろしてやった。
背中に背負われていた小朱雀はそれまでピクリともしていなかったが、外気の寒さにあてられたか、一瞬体を震わせると、いきなり羽をバサバサ動かし始め、包まれていた布から飛び出た。
狭いところからも解放され、一気に体が軽くなったレンは布をぐるぐる巻きにしたあとしっかり固く小さくまとめ、遠くへと放り投げた。
…断じてポイ捨てではない。民家の窓ガラスを割ったガキが見えたからそいつめがけて投げただけだ。
「うー、寒くなってきたなぁ……」
レンは広くもない屋上から城の影に染まる城下を見下ろし、落下防止のため少し盛り上がったへりによっこいせと腰を下ろした。
片方ずつ羽を伸ばして体をほぐしていた小朱雀はたくましい足でピョンピョンと跳ね、レンの横に止まったかと思えば、羽を大きく広げてそのまま城から落ちるように飛び立った。

「！！あぁ！？」
びっくりしてとびあがり、こちらも城から落ちそうになったレンは、城のへりから若干離れたところにまた座り直し、そこから小朱雀を探す。あー、怖かった。

小朱雀は、町のはるか上、そしてレンの視線をまっすぐ伸ばした先を飛んでいた。
はばたきは１０秒に１回程度とかなりゆったりしているが、それで落ちる様子は全く見せない。１回翼を動かせばとんでもないスピードで、且つこの上なく優雅に宙を舞う。
上昇気流とやらがあるんだったっけな？鳥さんはすげぇよな。
しばしその姿をあぐらをかいて眺めていたレンは、ふと思い立ち、右手の親指と中指で輪を作り、口にくわえて高々と指笛を鳴らした。

ピュイィィィィィ……。

「…アァ。ケアアァッ」
バサッ…バサッ……。
聞こえたのかどうかは分からないが、急に小朱雀は旋回し、進行方向をエクシン城へと向けた。
そこからはレンも驚くことに、およそ１０秒後、小朱雀はキチンとレンのところ、それも彼の座る眼前に見事に着地した。鉤爪が石造りの屋上にはじかれカチカチ鳴ったが小朱雀はそれに動揺する動きは見せない。慣れない環境だってのに、ずいぶんどっしり構えやがるなコイツ。
「…お前、すごいな。まだ飛べないんじゃ…」
というところで、小朱雀の翼がとじられ、と同時にレンは自分の目を疑った。
…さっき、傷を負ってたところ、どこだ？
レンの記憶によれば、この小朱雀は右翼にえぐられたような傷があ

ったはず。フウナによって治療はされていたが、それでもまだ産毛しか生えていなかったはずだが……。
その傷跡が、きれいさっぱりなくなっていた。
「小朱雀ってのは、みんなお前みたいなのか？不死鳥に似てるのも納得だな」
あらゆる傷を負っても、たとえ死すとも灰の中より蘇るという不死鳥を見たこともないくせにこんな言葉を吐くレンを、小朱雀は何も言わずにただ見つめている。
元々言葉を話すような生き物でもないが。
おいで、と両手を広げると、カチッカチッと一足ごとに音を立て、レンの足の間にスポッと小朱雀は入り込んだ。
この間に、今度こそじっくりと右翼の傷跡を見せてもらおう、と小朱雀の翼を勝手に広げる。それでもこの鳥は抵抗するそぶりも見せない。
「んーー。本当に無いや」
やはり翼の関節部分にあった傷跡はなくなり、今はただ朱い羽が密集しているだけであった。
疑いの晴れたレンはこの鳥の生命力に感心し、小朱雀を足に挟んだまま空を見上げる。
夕焼けにそまった空は、午前中のどこまでも透き通るような青空から、絵の具を溶かし込んだようなオレンジに様相を変えていた。
太陽が沈むと一気に寒くなるこの頃は、早めに下に降りてメシを食うに限る。
景色に見とれる暇もなく、早く下りることにしたレン。
「…ほれ、お前ももといた所に行きな。仲間とかもいるんだろ？ここじゃ木の実もないしなぁ…あ、でも町の正門には確かデッカイ木があったか」
何を鳥に話しかけているんだ、オレは。と思いながらも、その後も少し話し続けた。
「なぁに、オレの部屋のガラスを割らなけりゃ何やったって怒られ

はしねぇんだし、気楽に生きろや。おっと、お前はオレより長生きかもしれないのに、こんな説教はいらないかな」
これ以上鳥と1対1で話し込んで「鳥と話す変人がエクシン城の屋上にたびたび出現する」などと噂だてられてもかなわないので、レンは目をつむる小朱雀を両手で抱き上げ、屋上のへりへ歩み寄った。
「ま、今度は誰にも狙われないように高っっけぇ所でも飛ぶことだ。じゃあな、コチュジャン」
抱えていた両手を離すと、先ほどと同じように初めは城の壁に沿うように落下し、その後大きく翼を広げて空気の流れに乗った。
レンは、コチュジャンが一瞬こちらを振り向いたような気がしたが、それに気を留める事もなく扉を開け、城の中に入った。
うう、日陰は冷えるぜ……。
かじかみ始めた指を使って、梯子を下り始めた。

夕飯を済ませたレンは、単身ソウルシーフへと向かっていた。
自分が当番の週だと夜間門番の兵に「夜間見回りいってきまーす」と一言すればあちらもこちらも無問題なので、担当週だと面倒な反面こういうところで役立ったりする。
ソウルシーフに向かうといっても明日も朝の訓練があるワケで、遅くまで飲んで過ごすこともできない…つまり、レンはただ顔を見せに行くだけのつもりだった。
1人で橋のかかった堀を渡り、店火が地面を照らすメインストリートを直進。右から左からとてもうまそうな料理のにおいがプンプン香ってくるが、腹の満たされているレンにとっては、ともすれば吐き気をももよおしかねないくらいの脂っこい匂いとしかとられない。
…ヤベ、早く通らねえと本当に吐くかも。
バカみたいに3人分の食事を平らげたレンの腹は八分目の騒ぎではなく、酒場に行こうという気持ちを一瞬萎えさせたほどに体が重く感じる、ほどに膨れている。

そんな中、メインストリートに垂直に刺さる3本目の小さな路地を右に曲がり、明かりが全く届かない中を少し進むと、ソウルシーフの裏口へとたどり着いた。もちろんレンが使うのは業務用のちゃんとしたものではなく、その隣にある隠し戸の方だ。
そこで、レンはふと目が止まった。まるで、得体のしれない生き物を見たときのように、止まった目が細まり、さらに近くに寄り凝視する。

隠し戸が、開いてるぞ…？

隠し戸が開いていると言う事は、すなわち侵入者…
ではなく帰還者がいると言う事だ。侵入者などめったなことがない限り下に入ったが最後日の目を拝めないだろう。
タル山の特等席に陣取ったレンのすぐ下には、赤い髪をよほど丁寧に洗ったと見えて、つやつや光っている、宝探しに出かけていったスタンがまたもやサイズの大きいジョッキを手に持ち酒盛りをしているところである。
特にどこにもケガなども見当たらず、無事帰還と言ったところだ。
それに無理やり同行させられたダンも、机に座って周りに群がる団員達に今回の獲物らしき金貨やら何やらを広げ自慢げにしていた。
今、それを一つかすめ取ろうとした奴の頭を小突いた。
…元気そうだな。
「そりゃ、元気してたよ。何か月も行くわけやあらへんし」
「あ、声出てた？」
レンはスタンの腕に、今まで見たことのない腕輪がかかっているのを発見し、ちょっと意外そうに「ほぅ」と声をだした。
「それは、洞窟の中で見つけたモンか？なかなかよさそうなモノじゃんか」
「あ、これ？」

スタンがジョッキを持つ右腕の手首を指さす。
少し色あせたような銀色をしているが、別に装飾過多でもなく、２つ３つ小さめな宝石のような物体がはまっているだけのシンプルなものだ。これくらい鈍い色の方が、かえっていい味を出してると思う。
「せやで。いっちゃん奥にほんの少しだけあったんや。ほとんどダンに取られてもうたけど、ウチも何か月かは遊んで暮らせるだけはもろうたしな」
唇をとがらせてダンの方をキッと睨んだ。
とは言っても、財宝と言うものは大体において重量級であり、男性がいないと運ぶことすらままならないので仕方ないところではある。
でな、とスタンはレンの横に一息に跳ねて座り、肩に寄りかかってきた。
「あの洞窟…なーんか怪しいんや」
「酔ってんな。いつもそうやって要領を得ねーから独り酒をするようになっちまうんだよ」
「放っときぃ。…人目につかんトコにある割にはえらいキレイやし、洞窟の前だけ木ぃとかあらへんかったんや」
「つまり、人為的な作業が入った形跡があり、あの洞窟には何かが隠されているのではないか、と言う事だね？」

この酒場において、１人だけとても場違いな雰囲気をまとう男がレンとスタンの話に割って入った。
どう見ても２０代にもなっていないような、どこか幼さの残る銀髪の青年が、タル山のふもとからこっちを見上げている。
「ご一緒しても？」
「大丈夫やで！ほら、こっち来ぃな」
タルを一つ一つ上るごとに跳ねた銀髪がピョンピョン揺れるのを見ていると、無性にその髪をかき乱したくなる。んっとにコイツはこ

こにいるのがいつまでたっても似合わねぇよな。
「イヴ、オレと女の子の話に割って入るってことは、それなりに後で何かがあると思っていいんだな？」
「女の子はみんなのものです。でも、みんなのものはボクのもの。ボクのものもボクのも」
「腕立て１０００回」
「謝りましょう」
軽い見た目にさらに軽口が加わった青年、イヴは、レンとスタンの間の真下。つまり斜め前の１段下に着くとむこうを向いて座った。特に何の恨みもないが、コイツを見ると何かを投げつけたくなるのがレンの性分である。今も意識とは関係なく手を振り上げてコップを放り投げそうになった。
「でも、洞窟ん中には人が入ったような跡もなんもあらへんかったんや。普通そこまで手ぇ入ってんなら足跡とかも残っとるハズやし、不自然やったんや」
再開された話にふんふん、と、オレとイヴは部屋の下を見ながら頷く。
「て、ダンが言うとった」
「だろうと思ったよ」
スタンとダンは見た目と性格がまったくマッチングしていない。適当な見た目の割に今みたいな鋭い考察を繰り出すダンと、何にまで気が利きそうだが中身はズボラなスタンは生まれてくるときに雷にでも打たれて性格が反対になったんじゃないかと思えるくらいだ。ともあれ、イヴも今の話に興味を持っているようで、ねぇスタン、と上へ振り向く。
「その洞窟ってどこにあるの？」
「ウチらが行ったトコ？リザシンの近くや」
「というと、ナギサの森の中だね」
「せや」
ナギサの森というのはエクシンのすぐ北東にある森林地帯のことで

ある。
古よりの魔力よりきちんとした四角形をした森であり、人は知らず知らずのうちにその森を恐れ、足を踏み入れる人はほとんどいないという森だ。１辺はエクシンからリザシン、人の足で４日かかるほどの距離あり、中に何があるかを知っている人はもういないと噂されている。
「…せやから、ナギサの森のことを宝の森っちゅー人もおるんや。特にウチらみたいな人間にとっちゃそっちの方が一般的やね」
「それもダンから？」
「せや」
注意して聞かないと、スタンという人間を間違えてしまうため、レンも本腰を入れて話を聞かなくてはならない。話を聞くだけでこんなに疲れるのは、相手がスタンである以外に考えられない。
「イヴ、行く気か？」
どうせ「はい、ボク行ってきます」と言うのは分かってっけど、自分の推測があっているかどうかを確かめたい。
「はい、ボク行ってきます。スタン、道案内してくれる？」
レンの予想の範囲から抜け出せないイヴ。一方のスタンは少し渋っているようだ。
「んー、一昨日の昨日の今日で帰ってきとって、疲れとるんよ…。ゆっくりしたいんが本音かな」
「…よし、じゃオレも行こう」
「え？…なら行く～」
一瞬スタンの声が裏返った。ジョッキを傾ける手が止まり、危うくこぼれそうになる。
頭だけこっちに向けるイヴも同じような反応をしてくれて、レンの心が満たされた。
…何で満たされたのかは本人にも分からないが。
「１週間後だ。オレの当番週が終わってから行こうじゃないか。ついでにイヴも城に連絡しとけよ。…なんかあるとコアとかうっせー

から」
最後の部分だけ特別に感情をこめて話してやった。
「…そいで、ウチは全然構へんけど、なんで2人とも行こう思てん？」
心の底から不思議がるスタンは、心の中で思い描いた洞窟の景色と、「どうしてあんなトコに行きたがってん？」という疑問を重ね合わせている最中だろう。
そんなスタンの問いには、2人が同時に答えてくれた。
「城にいても退屈だから」
「ボクの心がそう叫んでいるから」

そして1週間。
さしたる城下での事件もなく、穏便に当番週を終えたレンは、その背後にイヴ並びにスタン、そしてどうしてもついていくときかなかったフウナを連れて、城には「他都訪問」と報告し、城門を外へと抜けていった。

城はヒマ（後書き）

こんばんは、馬チョウ雲です！
２週間ぶりの更新お待たせいたしました～
１１月に入ってめっきり寒くなりましたね。。。暑い日が～とかＴＶでは言ってますけど、まぁ徐々にとても「とても」寒くなってきますので、どうか皆さん私みたいに早々と風邪をひかないように注意してくださいね（笑）
ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7679v/

表裏の狭間

2011年11月15日20時13分発行